露伴十九章

Nineteen Studeis on Rohan Koda's Literature

日沼滉治

旬

カシミヤ・モスリンといえば、まず耳になつかしい毛織物のことが思われる。カシミヤはカシミール地方の産、モスリンはメソポタミヤのモスリン産、ただし、モスリンがなまってメリンスになると遠くスペインのメリンスが産地になるらしく、別に唐縮緬（ちりめん）ともいわれたりする。すでにどことなく南蛮渡来の洋物の手ざわりである。

この辺の事情は、あらかわ＝そおべえ編の『外来語辞典』（1967・9・25　角川第二版）に導かれて思案をめぐらしたにすぎない。佐藤健『マンダラ探険―チベット仏教踏査』（1981・6・10　人文書院）によれば、カシミールはさらに時代をさかのぼって仏教伝来の聖地ということであった。

現にインドとパキスタンとのあいだで、その帰属をめぐって紛争がつづいているけれども、それはそれ、カシ

ミールのスリナガルからチベットのラダックへ行く途中に人口一万のレーという町があって観光客でけっこうにぎわい、中には高山病にやられて滞在中ずっとホテルに寝たきりで帰る人もあるという。三五〇〇メートルの高地なのだそうな。

レーの町の野菜はスリナガルとラダックとからやって来る。うれしいことに、チベットから来る通称ラダック市場の野菜のほうがスリナガル市場のものよりはよほど新鮮で、品数はすくないながらホウレン草や小松菜やスモモ・ブドウが路上に並ぶのだという。

うれしい、といったのはホウレン草のことである。漢字で書けば菠稜草。かつて幸田露伴の『音幻論』などで、ペルシア草を意味することを承知していたので、あらかわ『外来語辞典』「ホウレンそう」の項にあたってみると、説明も引用も豊富なものである。

あかざ科の一年草、または二年草、葉・茎は食用、唐の太宗の時頗稜〔菠稜〕（ネパール）より献上、とあるのは、おなじ説明中に引用してある白井光太郎『植物渡来考』（1929・6　岡書院）で「尼波羅」を印度のNepalならん、と述べてあるあたりに相当するものらしい。そのほか「益稜」はペルシア（イラン）の意、とあって本邦では一六三一年、林羅山の〝多識篇〟に初めてその名が出てくる――とあるのは石井勇義『園芸大辞典』（1955・6・10～1956・1・5　誠文堂新光社）からの引用である。

ホウレン草栽培の起源は今でいうイラン、ペルシアにあったものらしい。イランは総体が台地がちである。ネパールやチベットやカシミールはむしろ高地というべきか。さきほどのホウレン草の産地ラダックからネパールの国境の西北端までは地図で見て四〇〇キロメートル前後、高峻な峠にさまたげられるが、まず地続きといって

よい。どうやらホウレン草は高地あるいは高緯度の栽培に向いた外来種の野菜であったものらしい。

人間の文化史シリーズの青葉高『野菜　在来品種の系譜』（1981・4・10　法政大学出版局）を開くと、日本の在来種は秋播きである。洋種のほうは春播き用の種をそのつど輸入する。

洋種ホウレンソウはデンマークなどのような緯度の高い北欧で改良された品種で、北欧の初夏のように昼の長さが一六時間以上にもならないと抽（ちゅう）だいしない。

夜分の暗期の長いことが勝負の葉菜ということである。昼の時間が長すぎると花芽や花茎がどんどん伸びてしまって八百屋の店先の売り物にならない。その点、輸入された洋種は、日本の春から夏へかけて昼時間の長さが北欧に及ばない。抽だいしない。まさに葉菜むきである。そのかわり種がとれないから、毎年数千トンの種をデンマークから輸入しているのだ、ということであった。

さて、秋播きと春播きとができてしまった。俳句の季節が問題である。たとえば草川俊『野菜の歳時記』（1981・1・5　ティービーエス・ブリタニカ）では十一月の章に、食用菊・すぐき菜・松島白菜・ほうれん草・山形青菜・野沢菜・飛騨べにかぶ――をあげて、ホウレン草は秋の扱いである。耐寒性がつよく、耐暑性はきわめてよわい。酸性土壌にはきわめてよわい。なるほど、いま列挙した野菜はおおむね寒い地方か山岳地帯で栽培されそうな名前ではある。とにかくホウレン草は在来種、霜をうけた葉菜のしなやかな味わいがなつかしい。

しをらしや細茎赤きほうれん草　　鬼城

ところが、おなじ鬼城の句が山本健吉『最新俳句歳時記』（昭52・4・25～昭47・1・5　文芸春秋社）では春の季語の例としてあげてある。いったいホウレン草の旬は、秋なのだろうか春なのだろうか。鬼城の「しをら

しや」を見るかぎりでは、ポパイが危急存亡の瀬戸際に缶詰から心せわしく嚥下するあの、マグサ然としたホーレンソーの感じではない。可憐な恥じらいを細茎の色に染めた、明治期か大正期の在来種、竹下夢二の女人を思わせる。

現実には長日性の春播きの洋種が出盛っている。在来種は、なつかしい。しおらしくもある。が、洋種に罪はない。まさかに俳句の季語を純粋ならしめるためにデンマークからの輸入を禁止するわけにはいかないだろう。在来種のごま和えなど賞味するかたわら、春先には健康のために蓚酸などゆで流して洋種のホーレンソーの大味をぼやきながら食することになろうか。季語の件は片づかないままである。

菠薐草。つまりはペルシア草であり、中国では菠菜（パオツァイ）ともいう。すでに発音が外来種である。季語の旬はさておいて、現実にわれらが食しているこの葉菜について、一度は外来語として、むずかしくいえば語用論の眼から見なおしてみるのもわるくない。いわば、菠薐草は当時の多民族国家の首都である国際都市長安を経由して列島弧に波及しきたった国籍不明の文物の一例にすぎなかったようである。

ペルシアはペリクレスから生まれた名前だとされている。ギリシアの英雄としておなじみの名前である。その語頭のｐ音は在来の日本語にないと思われていたけれども、明治二十九年の『帝国文学』第一巻第六で上田万年は論説欄に「清濁音」を発表し、ｐ音の有無を初めからとびこして、いきなり、

パ行を半濁音と称する事の全くいはれなきは後段の説明を見て知るべし。

といい、ｐ音が外来の不純な濁った音だとする旧来の偏見を斬りすて去った。これが有名なｐ音考の発端である。

つづく第九号では、「清濁音（承前）」として、例えば、

以上陳述するが如く、清濁音の区別は全く生理的及物理的に、声帯の作動如何楽音騒音の性質如何等を論究すべきものとす。

と述べ、むしろ音声の問題だという。日本語の在来音にp→f→h→wの変遷があって今日の内地音に至ったことは、いまでは常識といってよろしいだろう。そこで――。

内地方言のハ行音節の語頭が、奄美（あまみ）・琉球（りゅうきゅう）方言ではp音になる、だから奄美・琉球方言は日本語の祖形を伝えている、と言い切ってしまうと話が妙になるところが厄介である。祖形、というと、なにか純粋無垢、無菌培養の理想形が少なくとも想像されていて、それが枝分かれして形が崩れていくかたわら、ふしぎなことに祖形がそっくり大した変形もせずに今日に伝わった方言がある、などと考えたくなる。純朴で僻遠の地だったから祖形が伝えられたのだと、ついでにその理由についても考えたくなる、しかし、どんなものか。

奄美・琉球方言の地方の人が純朴でない、というのではない。古い日本語に関係なかろうというのではない。東シナ海をへだてて大陸の言語音がもろに波及する地域にあることを、事実として認めたうえでp音ならp音を考えたらどうだろうか、と思うのである。

インド・ヨーロッパ語族の祖形としてサンスクリット語を考えること自体、最近では眉つばものとされ、枝分かれ式な言語親族の系図が成り立つものかどうかが疑わしい。

華中には漢族の文明圏がある。鈴木秀夫『森林の思考・砂漠の思考』（NHKブックス　1978・3・10　日本放送協会）は、大陸の河川の呼び方が華中では「河」、その北側と南側では「江」と区別されることに注意する。橋本萬太郎『現代博言学　言語研究の最前線』（1981・2・1　大修館書店）が指摘するように、西域から波紋

状に南東部へ及んだ文物や言語が東北部や南方や琉球弧へ他の文物や言語を押しやり浸食したことも考えられる。

中原の言語や文物が、すでに国際的である。純粋とはいえない。揺れている。だましだまし使われていた。言文一致の意味も文体の意味も、そういった語用論の地平からいま一度考えることができるだろう。季語はその先の問題かもしれない。

モンゴル秘史

ジンギスカンかチンギス＝ハーンか成吉思汗（ジンギスカン）か。また鉄木真（テムジン）かテムジンか太祖か。Khan などは表音の差であり、テムジンが汗（カン）位に即（つ）いてチンギス＝ハーンと名のったのである。

戦後にチンギス＝ハーンをあつかった日本の文学作品といえば、井上靖の『蒼き狼』（昭34・10・1〜昭35・7・1『文藝春秋』）や陳舜臣『チンギス・ハーンの一族』（1995・4・5〜1997・5・31『朝日新聞』朝刊）がある。しかし、井上作品には大岡昇平を軸とする「蒼い狼」論争があって、そのご約三十五年の時が流れている。陳作品にはそれらを踏まえた下ごしらえがあったようだから、やみくもにひき比べても意味がないし、そのつもりもない。ただし、両作とも那珂通世（なかみちよ）訳注『成吉思汗実録』（明40・1・18、大日本図書）を基点としており、そこに触れないことには話の埒があかないようである。

「蒼い狼」論争が大岡昇平に分があるかに見えるのも、大岡がこの名著をかなり読み込んだところから来ているのかもしれない。幸田露伴も所蔵していたことは塩谷賛（しおたにさん）『幸田露伴』中巻が「成吉思汗伝奇」という仮題を掲げて証言しており、露伴が『竜姿蛇姿』（昭2・1・10　改造社）に収めたつぎの四篇もチンギス＝ハーン出現

に至る戯曲ではある。

「不児罕山（ブルカンざん）」（『改造』大13・11月号）

「清系縁起」（『改造』大14・1・3月号、総題「成吉思汗伝奇」）

「憤恨種子」（『改造』大14・1・3月号、総題「成吉思汗伝奇」）

「怪傑誕生」（『改造』大14・3・4月号、「憤恨種子」の一部として）

ただし、この四篇は戦後の二作品と比べにくい。最後の「怪傑誕生」でようやく一酋長が新生児に鉄木真（テムジン）と名づける。モンゴル以前の、バイカル湖の東南のブルカン山、黒竜江の一源たるオノン河などが世界である。蒼い狼と白鹿との草創神話や五本の矢の教えも含まれてはいるが、創作の機微も先行きも読みとれない。だいいち、大草原と馬の群れとを舞台にどのように乗せるつもりだったのだろうか。だが、「序」で露伴はいう、虚妄と作為とをはさむことを避け、「甚だしい空疎の想像と低卑の批判とを加えて」古人の「盛名を利用する卑怯」を喜ばなかった――。「蒼い狼」論争にもかかわる問題であろう。

『竜姿蛇姿』には他に「観画談」「望樹記」「暴風裏花」を収めてあるが、割愛しよう。「序」で露伴は戯曲四篇の典拠としたものをつぎのように挙げている。

元史　元朝秘史　元史訳文証補　聖武記　忙豁命紐察脱卜察安（モンゴルンニウチアトブチャアン）訳書　土耳古人（トルコじん）蒙古史訳書　米国人蒙古史訳書　蒙古遊牧記　朔方備乗　日本陸軍省撰蒙古図　及び其他の史籍雑書等

このうち『元史』というのは明の初代皇帝太祖の勅命によりわずか八か月で成り、出来のわるい正史とされている。『元朝秘史』は十二巻。原本がモンゴル第二代皇帝＝太宗オゴディの十二年（1340）に委兀児（ウイグル）字で書かれ

たモンゴル文であり、モンゴルの草創神話、チンギス＝ハーンの生涯、およびオゴディの即位に至る歴史を記している。おなじく明の太祖の洪武十五年（1382）にそれを漢字で音訳、語釈、文訳し、『元朝秘史』という名をつけたものである。「忙豁命紐察脱卜察安（モンゴルンニウチアトブチャアン）」は委兀児（ウイグル）字を漢字に音訳したもので、意味は〈蒙古の秘密なる実録〉ということだから、『元朝秘史』の原著にあたる。が、露伴の手元にあった那珂通世訳注『成吉思汗実録』との関係がはっきりしない。『聖武記』は『元朝秘史』の部分的な漢訳異本。あとの典拠については今のところ確かめられない。

しかし、日本におけるテムジンすなわちチンギス＝ハーンに関するまともな論議は那珂通世の訳注から始まっており、世界のモンゴル史研究にとっても画期的な業績とされている。「ジンギスカンは源義経なり」式の風説は日露戦争前後から目立ってきた俗説であろう。回り道のようだが、那珂訳注の周辺から見なおすのが近道なのかもしれない。

中国の通史にとってユーラシアにまたがるモンゴル帝国という存在は難物であったようである。『元史』は粗雑な代物であり、『元朝秘史』は伝本がまれであった。しかし、明治三十四年末、那珂と相知ったのが機縁となって、清国の翰林院侍読学士文廷式（ぶんていしき）が当時『万朝報（よろず）』記者であった旧知の内藤湖南にはじめてそれを伝えた。旧南部藩の湖南は影写せしめて郷学の先人である那珂通世に送り、それが『成吉思汗実録』の底本となった。

訳注の「序文」は蒼古な風格をもっている。その風格を損なわずに要点を伝えることは容易でない。いまは『宋代研究文献提要』（昭36・6・30　第一刷、昭四十九・九・二十第二刷、宋代研究文献提要協力委員会編、東洋文庫榎一雄）の要約に従いたい。那珂訳注が「単行本の部」一般史の筆頭に位する意味づけを示すとともに、

他にもこの『提要』から示唆を得ることが多かった、そうした謝意も表したい。ただし版元が筑摩書房とあるのは昭和十八年翻刻版との混乱か。『提要』は那珂通世訳注について冒頭つぎのように述べる。

本書は旧東京高等師範学校所蔵の「元朝秘史」の訳注であり、巻首には祭文廷式文・目録・序論を、巻末には「湖南内藤炳卿（へいきょう）の批評」を附した。

そのあと伝本の書誌にふれ、那珂通世訳注の特に注意されたところ三点を示している。

一、和文訳本の表題　二、蒙古の古文と和訳文　三、「元朝秘史」の音訳法

一は、日本の「古事記」にも比すべきものながら、実録ゆえ「成吉思汗実録」としたこと。二は、蒙古語が日本語と文法がはなはだ近いが、名詞・代名詞の複数には訳文で「等（ラ）」をつけ、否定の詞にはわが古語の「勿（ナ）」をもちいた。韻文の訳の左には原字の韻語を書き添えた。蒙古語には阿勒泰（アルタイ）語族に属する諸語と軌を一にする一種の音便があるが、その興味ある音読が訳文ではまったく跡形をうしなっていること。三、蒙古語の音の用法を明らかにするために蒙古字の下に中国南音による音訳漢字を附して一覧表に表し、満州文字の音訳法をも示したこと――。

原典の文法や、いわゆるウラル＝アルタイ語の母音調和に配慮した労作であることが、二や三によって明かである。独・露・満・蒙の諸語を独習しつづけ訳注公刊の翌年三月二日、那珂通世は世を去ったという。白鳥庫吉に「文学博士那珂通世君小伝」（明41・4、『東亜之光』第三巻第四号）という文があり、『白鳥庫吉全集』第十巻に見える。

博士は嘉永四年盛岡市藤村家に生まれ、幼にして那珂通高氏の塾に学び、擢んでられて其養子となり、後

東都に出でて慶應義塾に入り、専ら英学を修めたり。

千葉県で師範学校長・中学校長、東都で男女の高等師範学校長、華族女学校のあと高等師範学校・第一高等学校の教授、東京帝国大学講師――とあるが、慶応元年（1865）生まれの白鳥にとって十四歳年上の那珂は中学時代の校長先生である。那珂・白鳥・内藤と東洋文庫のことは江上波夫編『東洋学の系譜』（1992・11・1　大修館書店）にゆずり、むしろ真率な桑原隲蔵（じつぞう）「那珂先生を憶ふ」（明41・3〜4　『大阪朝日新聞』）に学びたい。

露伴が「不児罕山（ブルカンざん）」以下の戯曲四篇を書いたのは訳注からまだ十年余。「元朝秘史」の文学作品としては最初のものであろう。『真西遊記』（明26・3）で道教の長春真人＝邱処機（ていしょき）とジンギスカンとの出会いを述べたころからの主題であろうし、元曲をめぐる広い関心などから見て、当然の創作であったろう。ただし、なぜレーゼドラマ（塩谷賛）ふうな「幻灯映画的」（「序」）な戯曲にしたのか、それは分からない。中華文明にはない野性の英気を塞外の文物や言語に感じとったからであろうか。晩年の露伴からそう思うのみである。

以後の作家にも創作をうながした『成吉思汗実録』は、「けだし一個の立派な文学作品である」（大岡昇平「成吉思汗の秘密」『群像』1961・3）。その那珂訳注のそばに今日では村上正二訳注『モンゴル秘史』三冊（1972〜1976　東洋文庫）の詳密な注を置くことができる。

注に引かれる小林高四郎・岩村忍などの先学や、本田実信（みのぶ）『モンゴル時代史研究』（1991・3・28　東京大学出版会）・志茂碩敏（しもひろとし）『モンゴル帝国研究史序説――イル汗国の中核部隊』（1995・2・28　東京大学出版会）など国際的な業績を読める。杉山正明・大島淳子訳モーガン『モンゴル帝国の歴史』（平5・2・25　角川選書）などのペルシア語史料からするイスラームやキリスト教の視点が陳舜臣作品からも実感できよう。

関八州

天保四年からの大飢饉に関八州で飢餓に見舞われなかったのは野州（栃木県）桜町・青木村・烏山、相州（神奈川県）小田原、それと上州（群馬県）赤城村ぐらいのものであった。功労者は、二宮尊徳と国定忠治である。一方は報徳思想へと結晶してゆく復興仕法により、もう一方は博徒として私財や賭場のあがりを投げだし、二つを直接むすぶものはない。

しかし、尊徳に直筆を寄せて報徳仕法を韮山に懇望し幕臣への道をひらいたのは伊豆・相模・甲斐などの五か国の代官江川太郎左衛門英竜であり、忠治の義侠を「赤城録」としてのこしたのは下総・上野・下野の関東代官羽倉外記である。江川坦庵も羽倉簡堂も筆頭老中水野越前守忠邦をささえた開明派の幕僚である（高橋喬『国定忠治』2000・8・18　岩波新書〈新赤版〉685）。天保の改革にとって尊徳と忠治とは何者であったのだろうか。

幸田露伴に「二宮尊徳翁」（明24・10）という略伝がある。長篇小説『いさなとり』（新聞『国会』連載）と並行し、『五重塔』連載に先立つ作である。博文館や学齢館の少年少女文学に筆をとり、修養物や教科書編纂にかかわる最初期の作であり、「真西遊記」（明26・3　玄奘三蔵伝）・「日蓮上人」（明27・2）・「鄭成功」（明31・6）・「伊能忠敬」（明32・8）並みの扱いと敬語である。『報徳記』の事実が身にしみ、確かな行路と非を改める勇気とを感じとった、という雑誌回答（『人道』明38・12）も残っている。

しかし、代官や幕府にかかわる韮山・印旛沼・日光の仕法に触れていない。知らなかったということではない。大正末に企画された『二宮尊徳全集』（昭7・2完結）に先立って露伴は「机辺閑話」（『学鐙』明36・5臨時増

刊号、のち「閑話」の〈二宮尊徳〉に「利根川分水御普請見込帳」など十六点を挙げ、こう述べている。

幸に報徳の教を実践した村上氏の写本を多く借覧して一度は偶目する事を得た。

全集を編纂するかたわら書き上げたという佐々木信太郎『二宮尊徳伝』（昭10・6・15、昭15・4・5　八版、日本評論社）の章立てを挙げて尊徳の全事業を鳥瞰しよう。

第一章　幼時の艱難　第二章　一家の復興　第三章　服部の復興　第四章　藩政改革献策　第五章　桜町復興仕法　第六章　報徳仕法の構成　第七章　青木村の仕法　第八章　矢田部茂木の仕法　第九章　烏山の仕法　第十章　小田原の仕法　第十一章　相州片岡村並伊勢原附近の仕法　第十二章　大磯の仕法　第十三章　韮山の仕法　第十四章　下館の仕法　第十五章　幕府の任用と報徳仕法雛形の創造　第十六章　幕府直轄領の仕法　第十七章　日光の仕法　第十八章　相馬の仕法　第十九章　各地の代表的仕法　第二十章　二宮大先生礼讃　二宮先生年譜　述作由来

露伴は第十五章以下、〈御切米二十俵二人扶持の御普請役、幕臣二宮金次郎〉を伏せている。なぜ伏せたのであろうか。普請すなわち土木工事は利根川分水の工事であり計画立案である。松本清張は小説『天保図録』（昭37・4・6～昭39・12・5　『週刊朝日』）「二つの邂逅」の章で「印旛沼堀割工事には、水野越前守みずからがその総裁となっている。」として公儀役人六十四人のうちに「御普請役格二宮金次郎」の名をチラと出しているのだ。

たまたま尊徳にちかい時代と土地にかかる小説が露伴にある。未完に終わった長篇連載小説『風流微塵蔵』、特に「あがりがま」（明27・10・16～12・27　『国会』）という篇がそれである。小説全体は尊徳の没後二十年と

経っていない明治初年の上総・東京・武蔵を思わせ、連環風に局面も人物も遷移しながら展開する。「さゝ舟」「うすらひ」「つゆくさ」「蹄鉄」「荷葉盃」「きくの浜松」「さんなきぐるま」「あがりがま」「みやこどり」――。独立して読めるから、バルザックの『人間喜劇』叢書をどこか思わせる。単行本では「あがりがま」は二分されて、『ひとり寝』の題で「きくの浜松」其三十八以下と一緒に「さんなきぐるま」其十一までが収まり、其十二以下は『雲の袖』に収まっている。

問題はその内容である。国定忠治の身内みたいな人物が出没する。場所は東京から浦和の鹿手袋。小悪人どころか、河竹黙阿弥の白浪物じみた蠣崎十郎宗連と名のる侠盗まで登場する。二年前少年少女に二宮尊徳を説いた作者が、日清戦争のさなかに、「微塵蔵」と銘打つ連環体小説の行きがかりとはいえ、白浪物の連載である。この『風流微塵蔵』の中断を限りに露伴の作から「風流」という穏やかならぬ文字が絶える事情は別に考えたい。

幕末維新期の関八州は物騒であった。茨城県の真岡郡に生まれて一生をそこで過ごした『文庫』派の詩人横瀬夜雨に『史料維新の逸話―太政官時代―』（昭43・2・5復刊、人物往来社）という記録がある。明治初年の『太政官日誌』ほか全国紙・地方紙から記事を網羅した『太政官時代』（昭4）の復刊であり、そこに夜雨は回想している。

当時常総地方での脱走騒ぎは、天狗党騒ぎについでの恐怖として言い伝えている。鬼怒川河岸から上陸する浪士は、毎日のように西から東へと通った。下妻からも下館からも加わる藩士があって、それはみな会津へ行くのだといわれた。

さらに加賀者・越後者・来り人など、農民の戸籍に地盤液化が起こっていた。穏やかならぬ記事を詩人がこと

さらに拾ったものか、次のような項目が目白押しである。

八王子千人隊、揆、脱走騒ぎ、茨城・三重の大暴動、堺枯川『秩父騒動』、島田一郎、高橋お伝の往生際、強賊関口文七、教徒受難

最後の記事は、長崎近傍浦上村の隠れ切支丹を分散移住させて各藩へ「預」という慶応四年（1868）閏四月十七日の『太政官日誌』である。「〆二十四家人数凡四千人」の中に、当年数えで七歳の森林太郎（鷗外）の郷里、津和野藩亀井家もかかわった処分である。

近年奸曲無頼の徒、所々徘徊不作法の所業少なからず候処、昨年兵乱後より党与益繁く、暴行相募り、種々良民の害を働き、上州殊に甚しき趣（2年3月）

大坂天満与力の大塩平八郎だけがお上に楯突いたわけではなく、年貢をささえる米の経済に地盤液化が起こっていたようである。関八州に限っても、西北部の上州・秩父・三多摩の農民は年貢米はほどほどにして茶畑・桑畑や製糸・絹織物・藍染めに精を出す。南東部の常総は江戸湾・利根川の水運と治水とを介して江戸に食材や日用品を供給する。伊能忠敬や渋沢栄一だけでなく、金銭や流通にさとくなった庶民や博徒が往還していた。

天保の改革で、年貢と農民とを土地に固定させたまま天領藩領入り組んだ関八州と畿内に天領再編成を図ったとき、その上地令に御三家の紀伊藩と大奥とが逆らい、それが老中水野の命取りになったとされている。ひょっとして、水野らが二宮金次郎を幕臣に取り込んだとき、どちらも身動きが取れなくなったのではあるまいかと考えることがある。

守田志郎『二宮金次郎』（昭50・9・15　朝日新聞社）によると、相模国酒匂川沿岸の曾我に生まれ育った若

者がとかく小田原の藩士服部家の勝手口に入りびたっていたあたり、二宮金次郎という農民は父親の血を受けてすでに農民離れしていたという。幕藩旧来の質素な格式を説く一方で旧来放って置かれた負債の帳消しを考え出すなど分度と時効とは矛盾しているようでもある。小田原藩が分度を疎んじたことで、尊徳は郷里の土を踏むことができなくなった。質素と気骨で通した生涯が、痛ましい。

明治十八年、孫の尊親は福島県相馬から北海道十勝国中川郡豊頃に入殖し、四十年相馬にもどった。曾孫は北海道帝国大学農学部、玄孫は東京大学文学科に学び千葉県野田高等女学校の教壇に立った。越谷吾山のわが国初の方言語彙『物類称呼』、中島敦の曾祖父撫山の幸玉学舎など文化の厚みを思えば、尊徳の『大学』や忠治処刑の場の『孝経』はその一端であろう（高橋敏『国定忠治の時代　読み書きと剣術』1991・1・11、平凡社選書136）。

気骨と仁侠と。上州「塩原太助一代記」の作者三遊亭円朝と清水の次郎長と旧平藩士で天竜寺派天田愚庵の『東海遊侠伝』とが明治天皇侍従＝元飛騨代官山岡鉄舟を置くことでつながるという、時代のふしぎである。武州古利根川ぞいの出とされる清水一家の大瀬の半五郎はさて措き、鉄眼＝愚庵は磐城口の戦乱で両親や妹と生き別れ、職を変えて全国をたずねるうち、次郎長の養子になったが鉄舟に諭されて禅を修めた。立命館大学の創立者中川小十郎や漢学者桂湖村、また正岡子規との交流が知られている。

音　幻

幸田露伴の『音幻論』（昭22・5・30、洗心書林）は、独特な音韻観で語例が多い。要目を立ててみた。上の数字は発表順、A・①・【】以下は私に施した記号と概要である。

16序【昭21、昭和丙戌】

15音声を記する符【未発表】

2シとチ【昭19・8・1『三田文学』「音幻論一部―「し」と「ち」―」】

【風　シの系列＝アラシ・ニシ・ヒガシ・シブキ・ツムジ・ヤマセ・カゼ・イナサ、チの系列＝コチ・ハガチ・チル・ヒカタ・ハヤテ…他】

3近似音【昭19・10・1『三田文学』「近似音その他―音幻論の一部―」】mn

【n系とm系　猫の鳴き声、都鳥＝ミヤと鳴く鳥、蜷＝ミナ―ニナ、任那ミマナ―壬生ニブ―ミブ、ウナカミ、ヌバタマ―ムバタマ…他】

4本具音【昭19・10・1『三田文学』「近似音その他―音幻論の一部―」】

【唇音マ行バ行パ行発音の前駆をなす音　例　ウマ―ムマ、ウメ―ムメ、如来ッニョライ、乳母、宜ウベ―ムベ、蕪村句、小児語…他】

5ン【昭19・10・1『三田文学』「近似音その他―音幻論の一部―」】

【紫苑しをに、鼻腔音、自動車ズンドーシャ、永続性ある子音シ…他】

6韵（いん）【昭20・1・1『文芸』「韵―音幻論の一部―」】

韵　【アイウエオ、中国の入声p・t・k　フクツキチと陽類ンム、印度の別摩多ル】

【支那文字の入声を平声上声去声にして発音、富士・浅間（朝熊山（あさまやま）・阿蘇・安曇（あずま）・吾妻・アガツマ・アヅマ、支那は文字の国、印度は言語の国、支那の①古韵・②詩韵・③詞の韵、邦語の音

韵変遷、仮名遣…他】

声【その他の子音】

7音の各論【昭20・2・1、3・1、6・1、8・1、9・1『文芸』】

Aア・ヤ・ワ・ハ各行

①〜⑤アイウエオ各行【①ア→オ　扇…他、②イ→エ　越後で多く混淆、苛・辛・偉→エラシ、③息をいう古邦語イ　気噴(イブキ)…他、④イ→ウ魚は古言イヲ　茨イバラ・ウバラ・ムバラ、美しイツクシ…他、⑤アウ→オー　草子…他、⑥エ→イ　オメムシ→エメムシ…他】

⑦　ワ行音【ア行と非常に近似】

⑧〜⑩ヤ行【ワ行と同じくア行の親声　⑧沢庵(タクアン)タクワン…他、⑨例　煠(ユ)デル―ウデル…他、⑩内遷生憎(アヤニク)アイニク、イ行クのイ…他】

⑪〜⑮ハ行【ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ→ア・イ・ウ・エ・オ　ア行音へ帰遷】

【⑪フリ瓜(ウリ)、助詞へはエ…他、⑫準帰遷　ハ→オ　箒(ハハキ)ホオキ、フ→オ　葵(アフヒ)アフイ、エ→イ蠅(ハエ)ハイ、ヒ→ウ→発音オ　買ヒテ―買ウテ―コオテ、ヘ→ウ　マヘツ―マウツ　⑬内遷ハウ→ホウ　褒美(ハウビ)ホウビ、這フはハウと発音、蛇(ヘビ)ヘミ・ハミ…他、⑭ハヒフヘホ往遷と準往遷　助詞ハ→ワ、語中・語尾で母(ハハ)・専(モハラ)の例少ない、語頭の走(ハシル)ワシル・僅(ハツカ)ワヅカ、…他、⑮傍遷・準傍遷　ワ行→ハ行の例はまずない、ハ行→ヤ行には榧(カヘ)カヤ】

⑯　ファ系【北方の人、越後・出雲、九州の一部、朝鮮、アイヌなどにも】

⑰　ヒャ系【字音、雹ヒョウ、ヒョンな事、ヒョットコ、間投詞…他】

B脣音・喉音・舌音、半舌音【軟＝マ行（準備音ム・ウ）、硬＝バ行】

①〜⑪脣音・喉音【①真＝マ　真白、美＝真魚（マナ）、正（マサ）シ・円（マドカ）、甘（ウマ）シ・甘（アマ）シ・祈（マ）グ…他、②ミ音＝縦衝する性質の音　身（ミ）・実（ミ）・海（ウミ）、満（ミ）ツ…他、③ム音＝纏める意　胸（ムネ）・棟（ムネ）・畝（ウネ）　向（ム）ク…他、④メ音、⑤モ音＝中心より発したような意味　物（モノ）・本（モト）・萌（モエ）・面（オモ）…他、⑥マ音内遷　捲（マク）ル―メクル、鷗（カモメ）カマメ・隅（スミ）スマ・神（カミ）カム…他、⑦マ行に隣る音　ミャミュミェミョ＝印度から…他、⑧バビブベボ　多くは外来　馬鹿、⑨マウ・バウ→モ・ボ　申ス→マウス→モオスと発音、⑩ハ行バ行＝声変しやすい　童（ワラハ）ワラベ・斑（マダラ）マダラ…他、⑪ビャビュビェビョやピャピュピェピョ】

⑫〜⑮舌音・半舌音【⑫タラ・ダラ、⑬ナ行、⑭タ行内遷、⑮ナ行内遷】

⑯〜㉓助詞・助動詞【⑯ラム・ラメ・ラシ・レ・リ・ル・ルル、⑰尾呂・家呂・妹呂、詫びしらに・さかしらにのラ…他、⑱ラウをローと発音…他、⑲語頭に冠するときはロ→ラ、⑳ラ・レの相通、㉑リク・ロクの両音、㉒ナ行ラ行の遷移、㉓ダ行ラ行の遷移…他】

㉖　ラ行の遷移など【Rofle（蘭）ズーフル、ラ行―ン、播磨・駿河…他】

㉗　舌音に於ける拗音【チャチュチェチョ、ジャジュジェジョ、ニャニュニェニョ、リャリュリェリョ、皺クタ→皺クチャ…他】

C半舌半顎の音【摩擦的、サ行―タ行、殊にシ―チ、古くシ＝チか】

①〜②タ行と【①シとチ　古く風（シ）とも、紫蘇（シソ）チソ、江戸詞でワタシ―ワッチ・アッチ、ガッシリ―

ガッチリ…他、②万葉東歌の父―志志（チチ）…他【③～⑤ダ行と【③ジとヂ、ズとヅ、鯲ドゼウ・ドジャウ・ドヂョウ　辻ツジ・ツヂ、中世の仮名遣批判、④無意味な仮名遣法則、⑤歴史的仮名遣】

⑥～⑪各行と【⑥ラ行と　塞グ―フタグ…他、⑦ナ行　ダゾ―ダド…他、⑧ラ行と　ヤッパリ・バカリ―ヤッパシ・バカシ、⑨ハ行と　朝日アサシ…他、⑩バ行と　牙（キ）キバ、⑪サ行内遷　濯（スス）グ―ソソグ…他】

⑫　拗音　印度渡来【prajiñā 般若（ハンニャ）、ヴァイドリア vaidūrya 吠瑠璃（ヴェズリ）…他】

⑬　字音　中国渡来【中世以降の字音　笙サウ、嚔（クサミ）クシャミ…他】

⑭　サ行ザ行とカ行ガ行【ツツジ―躑躅（ツツキ）、磁石（ジシャク）ギシャク、私（ワチキ）ワチキ…他】

⑮　ガ行は二通り【硬いガ行と゛ガ行と　学校、高等学校、諤々（ガクガク）…他】

⑯～⑱カ行音【⑯香の説、⑰キ・ク・ケの説、⑱ハ行と　上海・ハモ…他】

⑲　サ行とタ行カ行と【幸サキ・サチ、乾竺（ケン）―天竺、犂靬ラチン…他】

⑳　カ行とマ行と【鷗カゴメ―カモメ、相模 seangmo サガミ…他】

㉑　ガ行がさらに硬い響きをなして【グゥラリ gwa、喧嘩ケンクハ…他】

㉒　カ行ガ行拗音キャキュキェキョ、ギャギュギェギョ【驚愕、擬声語】

14聯音【昭20・12『文芸』】【前後の韵と声とが響きあう幻性　連声・連濁・ガ行音の硬軟・音便・長音・拗音・鼻音・入声…にわたる総称か　例が多数】

8累音・9対音・10省音・11添音・12倒音・13擬音【昭20・11・1『文芸』】

【8累音①日日カガ…他、②少々波ナ少々蟹…他、③目メメ…他、④ソレゾレ、コレコレ…他、⑤飛々…他、⑥懲懲コリコリ―コリゴリ…他、⑦兼々、熟々…他、⑧三音、⑨累音の中の省音、⑩添音　凝ル→コゴル…他、⑪びんび酒…他、⑫色々なイロンナ　9対音①ノラクラ…他、②アタフタ・シドロモドロ…他、10省音　国学者の説に疑問①②、11添音＝延える音①牡丹ボウタン…他、②訳の分からない添音、③オッコチル・オッコトス…他、④載る→ノッカル…他、⑤ペ・ポ・チの添音　ウスッペラ…他、⑥発音上の習慣　鳶トンビ…他、△デブッチョ、キザ…他、13倒音　茶釜チャマガ、アラタシ→新シ…他、△蛤グリハマ…他、14擬音　鳥の名や虫の名に多い】

1附録　言語と文字の間の溝【昭13・9『文学』〈岩波書店編輯部記者、羽仁五郎〉】

刊行の二か月後、昭和二十二年七月三十日に露伴は永眠した。露伴最後の言語論であり、「ふっつかな形ではあるが」音韻論のあらましであるという。

舞　い

舞いと踊りとは違うようだ。音楽に合わせた身振りや手振りとして「鯛や比良魚の舞踊り」とか舞踊とか言うけれども、舞いは水平にゆるやか、躍りは上下に活発。舞いは個人、踊りは複数。舞いは上等で踊りは庶民風。舞いが古く、踊りは新しい感じがする。ダンスや舞踏よりは古風で「舞い」のほうが含みがおおく、仕舞う・見舞う・振る舞う、など舞踊と縁のなさそうな行為にも使われている。が、今ひとつ違いがはっきりしない。

幸田露伴に「舞」という文章がある。『蝸牛庵聯話』（昭18・1・25　中央公論社）の中の一章をのぞいてみた。しかし、いわゆる暗黒時代―足利期の舞曲と狂言とは言語資料として貴重、という趣旨と事例とを述べたもので、舞いとはなんぞやという問いに答えるものではなかった。そのかわり、つぎの「義経、弁慶」の章に弁慶が寄せ手を前にひとさし舞う「衣川合戦の事」が紹介してあった。

弁慶其時ふんばたかり、扇をさつとおつぴらき、われがね声をつゝぱり上げ、うれしや瀧の水、日はてるともたえず、とうたり、あづまくだり（東くンだり）の奴原が兜（かぶと）をかぶった細首を、我が長刀（なぎなた）でぶつ切って、衣川の川下へつんながしてくれべいと、歌ひながら舞うたれば、

「義経記（ぎけいき）奥州本」で、「安永八年己亥（きがい）正月二十六日、以水戸彰考館古蔵本謄之（これをうつす）」という奥書つきだが安永（1772〜1780）期の言語資料にもならない、閑談の資のみ、という。

露伴は弁慶が好きだったようである。つづけて「山伏」の章でも、三国志の豪傑、燕人張飛の筆跡を引き合いに出して「弁慶何ぞ張飛に如（し）かざらんや。抑又（そもそも）西塔の法師」と気炎をあげている。その延年の舞や謡曲「安宅（あたか）」にも触れ、「弁慶は安宅によりて文学的生命を得たりといふべし。」と結んでいる。『蝸牛庵聯話』は昭和十三年から十八年にかけて『中央公論』に掲載された。ややおくれるが、「春の日俳句評釈」（雑誌『文学』昭18・12月号　岩波書店）の「夏」の部でも「武蔵坊をとぶらふ」商露の句に丁寧な評釈をしている。

すゞかけのしでゆく空や衣川　　商露

弁慶に手間取った。舞いなら静御前に触れるべきだろう。芭蕉七部集第三『曠野（あらの）』に三句見えるが、露伴の『評釈曠野』は最晩年の口述であり、発表が入り組んでいる。「巻之二」（昭19・1〜12月号）に荷兮（かけい）の一句、「天

津雁の巻」（『評釈曠野　下』昭23・5）に其角（きかく）の連句が二句ある。

しつやしつ御階にけふの麦厚し　　荷兮

文治元年（一一八六）四月八日の舞いで、事は『吾妻鏡（あづまかがみ）』巻五、六に見えるという。

源頼朝夫妻鶴岡八幡宮に詣るの次（ついで）を以て、静をして舞を奏せしむ。（略）工藤祐経鼓を鼓し、畠山重忠銅拍子を拍（う）つ。静立つて舞ひて、先づ、芳野山峯の白雲踏み分けて入りにし人のあとぞ恋ひしき、と吟じ、後又、しづやしづ倭文苧環（しづのおだまき）くりかへし昔を今になすよしもがな、意緒綿々、義経を思ひて、勢威に屈せず。

其角の句は同五月二七日、「頼朝の女の大姫」の病をなぐさめるための舞い、とする。

静御前に舞をすゝむる　　其角

空蝉（うつせみ）の離魂の煩のおそろしき　　同

「離魂の煩」を〈かげのなやみ〉〈かげのやまひ〉と読み、大姫は源義仲の子清水冠者義高の妻。頼朝と義仲に抗争がおこり大姫は夫の義高を逃したが追われて斬られたと知って愁歎、飲み物を絶って病を得た。その大姫のための舞いである。大姫と静と「両女相見て無限の情有りしなるべし。」のち「憂を以て死す」、と露伴はいう。

静御前が大姫の前で活発に踊ったとは思えない。舞いと踊りとは違うようだ。アマノウズメノミコトが天の岩屋の前で優雅に舞ったとは思えないようなものである。和漢の楽器については『蝸牛庵聯話』に「青磁、白磁、音楽」があり「琵琶、箜篌（くご）、緪（きつ）」があっておおいに学び得たが、舞いと踊りについては、露伴から決め手は得られなかった。

が、静御前のころの歌謡を収めた『梁塵秘抄』につぎのような「舞ふ」の例がある。

舞ゑく蝸牛、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹴ゑさせてん、踏み破らせてん、真に愛しく舞うたらば、華の園まで遊ばせん（408）

にじり這うのも舞いのうちと、たわむれたのであろうか。諸注釈とも説明はない。

森鷗外の小説『舞姫』などはBallettuseの訳ならば〈踊子・舞子〉でよかったろう。しかし荻原雄一編『『舞姫』――エリス、ユダヤ人論――』（平13・5・15　至文堂）の諸論文を読むと、鷗外訳アンデルセン『即興詩人』の歌姫アヌンチャタに重ねてエリスを舞姫と呼んでやりたくなる。ローマ「猶太の翁」「猶太をとめ」の出会いからエネチアの再会と訣別など、母のために鷗外が明治二十五年秋から訳出に八年余をかけた心意があろう。

国のない民や技芸。宋の首都汴京（開封）にユダヤ村や教会があったことは、桑原隲蔵「隋唐時代に支那に来住した西域人に就いて」（大15・5）にあり、シリアやローマとの東西交流は宮崎市定「条支と大秦と西海」（初出1939・1・1『史林』24巻1号）などに見るとおりである。

街のにぎわいは孟元老『東京夢華録』（入矢義高・梅原郁訳、1983・3・24　岩波書店）や『榎一雄著作集』の第四巻（1993・5　汲古書院）「支那の曲芸」などに察せられる。

いや、列島弧の舞いや踊りにしても、孤立していたわけではない。改めてそう心づいたのは、傳起鳳・傳騰龍著、岡田陽一訳『中国芸能史――雑伎（サーカスの誕生から今日まで）』（1993・5・15　三一書房）や諏訪春雄『日中比較芸能史』（平6・1・10　吉川弘文館）に教わったあとである。越智重明の遺著『日中芸能史研究』（2001・10・11　中国書院）に圧倒されながら、藤原明衡『新猿楽記』（川口久雄訳注、1983・8・10　平凡社東洋文庫）と小中村清矩『歌舞音楽略史』（1982・7・20　岩波文庫）を読み直した。

巻の第三「大宝以来内外の楽を朝廷に用ゐられし事」・第四「唐土高麗より伝来の楽并我国新製の楽の事」から、神楽・催馬楽・東遊・風俗、朗詠・今様・雑芸、平家、散楽・猿楽、猿楽の能・狂言、白拍子・其他の舞、歌舞伎狂言、浄瑠璃節・操人形、三味線・筑紫琴、小唄・長唄等――。そして第十六「歌舞音楽沿革総論」。あとがきには「明治二十一年十一月のはじめ」とあり、さかのぼる明治一三年七月より約六十日間の執筆である。

改めて〈あそび、ふむ、ふり―ふし、うつ―うた―よむ〉といった古い日常語をふりかえり「六法・反閇・禹歩」（諏訪著）などの由来を考えいたら、ある名前が浮かんできた。

伊沢修二。小中村翁と同時代の音楽教育・殖民地台湾の国語教育などなど、を代表する名である。台湾と農商務省・農政学のことはしばらく措き、その音楽教育―アイルランドの旋律がもたらしたものと在来の歌舞音楽との出会いとねじれを象徴する名であろう。

対して思うのは小泉文夫という名とその「民謡の基本的表現様式」である。『日本伝統音楽の研究　2　リズム』（小島美子・小柴はるみ編、1984・8・20　音楽之友社）第三章「リズムの基本的表現様式」第一節「民謡のリズム」に収められた論である。

八木節様式は、主として労働や舞踊のような集団的環境で、個別的というより、共同体的な情感をあらわす唄で、旋律はメリスマが少なく、歌詞に密着しており、音域はあまり広くなく、リズムは明確な拍節を持っている。（一二一ページ）

とあって、八木節様式に対置して追分様式をあげ、〈気分や感情・メリスマ・歌詞・音域・リズム・拍節〉を対照したものである。なるほど八木節様式に踊りを、追分様式に舞いを感じる。が、獅子舞と鹿踊り（原体剣舞連―

宮沢賢治詩など）との違いが片づいていない。

伝統音楽の楽理をさぐる創意ではあった。「八木節様式・追分様式」、「核音」（小泉・繁下和雄）、列島弧住民のリズム感の四大別（小島）などなど。しかし、水田耕作民の静的な二拍子、海洋漁労民の拍ごとの縦揺れ、山村畑作民―宮崎県椎葉（しいは）村の強拍弱拍、採集狩猟民―朝鮮韓国のビート感の強い三拍子など、どこかまだすわりがよくないのだ。

藍川由美『「演歌」のススメ』（平14・10・20　文春文庫）の批判もあり、大橋力「日本伝統音楽と音のゆらぎ」（小島美子・藤井知昭編『日本の音の文化』1994・6・1　第一書房）など、西洋の楽理にない微細なゆらぎ構造を解析する試みに注意したい。

美食譜

『蝸牛庵聯話』という素朴な、しかし品は悪くない本がある。できてきた自分の本を評して幸田露伴は、「紙の玄米だ」といったそうだ。中央公論社の発行、昭和一八年一月二五日の日付で三千部、定価「貳圓五拾銭」とある。その本の隣に、

釣魚台（ちょうぎょ）国賓館『釣魚台国賓館美食集錦』（1995・3・28　主婦と生活社）

を置いてみる。金ピカの箱にはいって「第一巻　料理写真編」と「第二巻　料理解説編」とを収め、箱のうしろに横書きで「発行記念特別定価四八、〇〇〇円（一九九五年九月三〇日まで／本体四六、六〇二円）」とあり、その下に「定価六三、〇〇〇円（本体五一、四五六円）」とある。

造本といい定価といい、およそかけ離れた二冊を並べたのはほかでもない。『蝸牛庵聯話』の最後にある「張俊供進御筵食単」という一篇を味読したいためである。

南宋初代の高宗をわが軍閥の府に迎えた張俊が供進した宴会の食単―メニューは、献上品目録「進奉宝器」をはぶいて引き写すだけでこの章をはみ出してしまうので、フル・コースの標目のみ番号をつけて掲げよう。（音は青木正児訳注『随園食単』〈清代〉を参照）

1御筵初坐繡花高　一行　2楽仙乾菓子又袋児一行　3鏤金香薬一行　4雕花蜜煎一行　5砌香鹹酸一行　6脯腊一行　7再坐切時果一行　8時新果子一行　9雕花蜜煎一行　10瓏纏果子一行　11脯腊一行同前　12下酒十五盞　①第一盞　②第二盞　③第三盞　④第四盞　⑤第五盞　⑥第六盞　⑦第七盞　⑧第八盞　⑨第九盞　⑩第十盞　⑪第十一盞　⑫第十二盞　⑬第十三盞　⑭第十四盞　⑮第十五盞　13挿食　14勧酒果子庫十番　15準備上細塁四卓　16又次　17細塁二卓　18対食十盞二十分　19晩食五十分名件　20直殿官　①大煠下酒　②合子食　③果子　21外官食次第一等太師秦檜　蜜煎三十楪酒三十瓶〕　22少保秦熺　23第二等　少師楊存中等六人　24第三等　吏部尚書陳誠之等二十八人　25第四等　第五等右監門居間等一百二十五人　中官五十人〔品目皆略す〕　26進奉宝器〔品目略す〕　27随駕官知雀御薬門司直殿官〔品目略、ただし食品では①炊餅二万箇　②熟猪肉三千斤　③燒爆三十盒　④酒二千瓶〕

露伴の考証と清代の袁枚『随園食単』青木訳注（1980・1・16　岩波文庫）ほかをたよりにたどると、1～12は初坐・再坐と席をあらためながらアペタイザーもしくはオードブルつまり冷葷であり、13～19がメインディッシュ、20～25がお付きのお歴々へ供した料理、26が天子への献上品、27がお供へのおみやげ。以上のうち、2

「乂袋児一行」は、露伴が「乂字誤る歟」とするもの。袋に詰め合わせた乾菓子ひとそろえであろう。具体例として3「鍍金香薬一行」に盛られた細目を、宋代音不明なまま陳列してみよう。

脳子花児　甘草花児　硃砂円子　木香　丁子　水竜脳　史君子　縮砂花児　官桂花児　白求　人参

すべて、金のかざりをあしらった本草や香液の薬餌。西域や南海渡来の高貴品である。

メインディッシュ12「下酒十五盞」について露伴は「下酒は酒を勧むるなり。酒を盛りて盞を奉ず。奉ずるごとに、酒を下すの肴を供す。是れ定式なり。」という。⑩「第十盞」は、

洗手蠏　鯚魚仮蛤蜊

「洗手蠏」は、蟹を活きたままさばいて塩梅をそそぎ椒や橙酢を添えたら、手を洗いおえてすぐに食らうべし。そう宋人の伝肱『蟹譜』にあると露伴はいい、「鯚魚仮蛤蜊」の「鯚」は「浮」の誤りではないか、江豚すなわちイルカに似て小成る水獣の、小片をハマグリかアサリもどきに調理したものであろう、という。「鯚」はくちばし鋭い海魚であろうか。

おなじ豪奢でも、張俊が用意したメニューにくらべて釣魚台国賓館の料理は現代風にすぎるようだ。釣魚台は南宋の高宗にややおくれて約八百年前の金の章宗皇帝が釣り糸を垂れた、それにちなむ名勝地ながら現代中国料理の国賓館である。用語もかけ離れている。

露伴がどこでこの張俊の記録を目にしたのか気になるが、まずは食材や調理法が問題である。中村喬編訳『中国の食膳』（1995・11・9　東洋文庫594　平凡社）をのぞいた。

『山家清供』（宋　林洪）1青精飯　2碧蒄盤　3苜蒄盤　〜102胡麻酒　103茶供

『居家必用事類全集』「飲食類」（元　欠名）　蔬食　肉食（醃蔵肉品・醃蔵魚品・造鮓・焼肉品・煮肉品・肉下品・肉灌腸紅糸品・肉下飯品・肉羹食品）　回回食品　女直食品　麪食　素食　煎酥乳酪品　庖厨雑用　調料　材料

（付録）『中饋（き）録』（浦江　呉氏）　脯鮓　製蔬　甜食

宋代に近い三著を収め、精進もの・塩蔵・なれずし・腸詰め、西域・北方の料理、とくに『居家必用事類全集』から張俊「食単」の食材や調理に見当がついてきた。さらに、

田中静一『一衣帯水――中国料理伝来史』（昭62・10・1　柴田書店）

旧満州以来の研究――、「中国食物史年表」「料理書及び関連書籍の部」、また「茶書の部」「酒書の部」に頭がさがる一方で、「年表」の次の記事に目がとまった。

斉南人、周密（一二三二～一三〇三）『武林旧事』一〇巻を著す。武林（浙江省杭州の通称）の盛時、市中の様子や商店、飲食物などについて詳しく述べてある。特にこの本には南朝初代の高宗（在位一一二七～六二）が一一五一年冬、軍閥の巨頭張俊邸でおこなったときのご馳走の献立案「張俊供進御筵食単」二〇〇余種全部が再録されている。この食単の内容は、日本の明治の文豪、幸田露伴の『蝸牛庵聯話』に詳しく解説されている由。（年表）

露伴が「当時の記録の幸張府節略次に出づ。」「明の回汝成、其の本づくところを明記せずと雖（いえど）も、転録して其雑著に載す、」としていた、その典拠である。「幸張府説略次」とは、高宗が張俊の府に幸せられた節の略次であろうが、露伴の単行本では「回（ママ）汝成」と著者名を誤植し、その書名も「雑著」で片付けてあった。実は、南宋末

の周密『武林旧事』中の「幸張府節略次」にあった〈張俊供進御筵食単〉を、明代の田汝成（1232～98　浙江省銭塘の人、字は叔禾）が転録した『西湖遊覧志余』で露伴が見たという大筋になる。

以上は、京都の青木正児教授の諸労作によって今日明かである。訳注『随園食単』（昭33・8初版、六月社）と「訳余贅語」は岩波文庫に収められ、水谷真成「解説」を加えて書誌とその〈名物学〉の意義とに詳しい。また同著『華国風味』は、「自序」に「主食遅配のもなかにしるす　迷陽老饕　昭和二十二年七月」とあるとおり、旧師露伴の『蝸牛庵聯話』同様、主食の乏しいなか〈食いしん坊老人〉が記したささやかな贅であった。

思えば「張俊供進御筵食単」の発掘と訳注がすでに労作である。蛇足を加えれば時新果子は季節の果物。合子は蓋つき碗。楪は朱塗りの木皿。脯腊はほし肉。煠はあぶる・揚げる・焼く。熟猪肉は煮えた猪肉。爊爆は焼く・あぶる・蒸す。酥は酪を造るとき表面に張るバター状のもの。虀は漬け物、和え物。鮓は浅漬け、なれずし。蛤蜊はばか貝、はまぐり。事件は各種、といった意味。鹹鼓はつぶ納豆、つくだ煮。蓮は葉も包み焼きに使う。羹はあんかけ汁。仮は、もどき。餅は小麦粉製。肚肱は牛羊など反芻動物の胃袋（孟元老著―入矢義高・梅原郁訳注『東京夢華録』1983・3・24　岩波書店）。水晶は煮こごり。

王仁湘著・鈴木博訳『中国飲食文化』（1994　人民文化社、2001・11・21　青土社）を手に『蝸牛庵聯話』「張俊供進御筵食単」を見ると、あべ川餅・餅・茶・苜蓿・飯、のあと「芭蕉、利休の食単」をうけた結びの考証であった。その典籍人名なりと示そう。

橘録　西鶴　潘州の郭使君　波斯国　漢武帝内伝　耆婆　説文　清異録　欧陽修帰田録　王義之　郭汾陽
代宗　呉興記　爾雅翼　呉都賦　陳氏潘氏の菌譜　王禎　農書　夢粱録　古書　山堂肆考　酉陽雑俎　都城

紀勝　五雑俎　宋人の書　古伝説　捜神記　水族加恩録　夢華録　礼記　呉王闔閭　隋煬帝　杜甫　黄山谷
陳思王　蟹譜　宋人伝肱　事物紺朱　居家必用　たいらぎ　呂覧　伊尹　荘周　易牙　玄宗　文王　孔子
孟子　晏子　高宗　滹陀河　秦檜　張俊

露伴はこの食単を賛美したわけではない。滹陀河に囚われの父徽宗を思えば、高宗よ、金と妥協する秦檜や張俊ごときと贅を尽くしてもいられまいに、というものである。

ン　？

子どもがジャンケンをしている。グーで勝った子が〈グ・リ・コ〉といいながら三歩すすむ。チョキで〈チ・ヨ・コ・レ・エ・ト〉、パーで〈パ・イ・ナ・ツ・プ・ル〉。スタートまでの往復をきそっている。五十音図の仮名の音節で切っているナ、英語やアメリカ語ならchocolateで三音節か、pineappleもGlycoも二音節か、glycogenでも三音節。外人の子は損だな。いや、おなじルールで遊ぶんだから歩幅が大きい子が得か。敗戦後、表通りも裏道も車が滅多に通り抜けることのなかった時分、立ち止まって見ていた。

日本の子どもは、教わらなくても、母音で音節を切る。開母音を心得ている。ある折にそんな思いつきを披露したら、「そんなことありません」、やにわに否定された。いやにキッパリ断言する。その方、出身地の津軽ことばを考えていたのだろうか、と思った。

退いて考えるに、自分の思いつきはアラが多かった。〈ジャン／ケン／ポン〉〈アイ／コデ／ション〉、子どもは拳を三回ずつ上下するではないか。〈グー、チョキ、パー〉では順に拳をひろげ、呼気もひろげている。パー、

チョキ、グーなど聞いたこともない。

聞きかじりの開音説と東京語を定規にして音韻や音節を語る愚を思い知らされ、松本清張『砂の器』（昭35・5・17〜36・4・8『読売新聞』夕刊）にあった推理の壁を思い合わせた。

被害者がずうずう弁で〈カメダ〉とか話していた――、警視庁捜査第二課のだれそれ刑事は秋田県の羽後亀田にさっそく出向くがムダ足におわる。国立国語研究所をたずねてもう一か所、ずうずう弁の出雲地方を教えてもらい、島根県の亀嵩を突きとめる。ずうずう弁といえば東北地方、という思いこみに一度つまづいたという謎解きであろう。

幸田露伴はいう、「或地方と他の地方との言語の差」を論ずるとき鼻腔音「ン」に思いを致さないのは「甚だ不用意不精密」。方言という言い回しも用いない。「自動車をズンドーシャと発音すると言つて甲の地方の人は乙の地方の人を嗤ふけれども」とつづけ、

元来内気を外気に投出すのに勇敢なる能はざる寒冷の地方の人の口腔を開かずして鼻腔より発音する習慣がかくの如き結果を齎したのであらう。（『音幻論』「ン」）

論議の余地はあるだろうが、こう東北方言のために弁じ、『音幻論』（昭二十二・五・三十、洗心書林）は「ン」という章まで立てている。「ン」という文字と音韻に手こずったといい、「鼻腔音」とかりに名づけて「口腔の運動を閉塞せしめても出し得る音で、母音とも子音ともいいがたい永続性を有する音である」という。「このンの音は邦人の発音するもののうちですこぶる幻性をもつてゐるもので且つ異様な性質をもつてゐるのである。」

鼻腔口腔といえば柴田武「音韻体系」に、シラビーム方言・モーラ方言、四つがな弁・ズーズー弁といった区

分がある。（国語学会編『方言学概説』〈「方言学概説」編集委員会―時枝誠記・亀井孝・金田一春彦〉、昭37・11・30　昭43・1・1再版　武蔵野書院）

シラビーム方言〔（1）四つがな弁・（2）中性弁・（3）ズーズー弁〕

モーラ方言　〔（4）四つがな弁・（5）中性弁・（6）ズーズー弁〕

音韻を二大別し、それを東西に分かって【A】表日本＝よつがな弁、【B】裏日本＝ズーズー弁、【C】その中間地域＝中性弁、としたようでもあり、部類分けがあざやかすぎてこわいくらいである。日本語母音優位説や露伴の気候相関説とは別な見地だろうか。

この二大別に近いのかもしれないが、日本語のアクセント・リズム・イントネーションについては、拍 beat（≒モーラ mora）を立てる説と音節 sllable を立てる説とがある。

拍〔beat ほぼ仮名一字。濁音・半濁音・促音・撥音・長音は一字、拗音は二字分。〕

［ニ・ッ・ポ・ン］［ガ・ッ・コ・ウ］［セ・ン・セ・イ］［コ・ウ・エ・ン］

音節〔sllable 母音が核。「聞こえの山」か音声器官の「緊張―弛緩」で分ける。〕

［ジャン／ケン／ポン］［ス／ミ／マ／セーン］［アッ／カン／ベー］

ここでいう四つがなとは、「じ」「ぢ」「ず」「づ」の四つの仮名および、その仮名で表される四つの音をいい、室町期の末から混乱しだした。区別できる―できないで四つの方言に分ける言い方がある。四つがな弁〔高知・福岡南部・大分・宮崎・鹿児島〕、三つがな弁〔国東半島〕、二つがな弁〔共通語を含む〕、一つがな弁〔東北・出雲〕、である。

羽後亀田と出雲亀嵩はともに一つがな。露伴のズンドーシャも含めて柴田説のシラビーム方言の（3）に属することになれば、『音幻論』もまんざら捨てたものではない。

我々は兎角に五十音図に捉はれて話をするので、その利も受けるが弊も受けてゐることが少くない。しかし今は一応、五十音図に即いて声韵のことを言ふ。

露伴は五十音図の弊をいう。が、五十音図をまったく認めないわけではない。「韵」を語るのにアイウエオからワヰウエヲまでの順をたどっている。アイウエオの説などは音韻それ自体に意味があるとする音義説を疑わせ、鎌倉期の語源辞書『名語記』などを連想させる。しかし、露伴は口むろの開きが心理におよぼす運用面に注意したようである。

五十音図よりも、舌や鼻むろまで含めた口腔鼻腔の粘膜全体の動きに注意していた。いや、吸気呼気の動きに注意していたのかもしれない。端的にいえば、「ン」である。

「ン」は、いろは歌にも五十音図にもまともな籍がないが、中国の音韻では陽類とされ陰陽の陽である。いわゆる母音は陰類扱い。古代インドの音韻をひく仏教音韻学―悉曇（しったん）では空点と呼ばれ、涅槃（ねはん）点のｈ系とともに別扱いである。ｈ系の気音がハ行音や英語・フランス語でちょっとした難物であることを思えば、「ン」も要注意なのではあるまいか。

耳なれない用語だが『音幻論』にある「近似音」も、鼻腔にかかるｎ系ｍ系ぬきでは成り立たない。「ン」に縁があるのだろう。互いにまぎらわしい音を「近似音」という。

邦語でネコといふのは蓋（けだ）しその動物の鳴声がネと聞えるよりしてネコと言ったので、コは他の動物に弘く用

ひられてゐる意味と同じであるに相違ない。

わが国語ではn系、支那西洋ではm系に聴く。わがネコは「支那に於いては通俗字書に音苗miao又は茅mao」、鳴き声を「英語はmiaow仏語miaou独語miau」と述べ、我が国でm系に聴いていた証拠もある、として『伊勢物語』八段の歌「名にしおはばいざ言問はむ都鳥」を引く。あれは「都の鳥の意味ではなく本来はミヤと鳴く小鳥の意味」。

露伴は小野蘭山の『本草綱目啓蒙』を引く。鷗を筑前にてネコドリ筑後にてネコサギ上総にてウミネコ武州本牧にてハマネコとよぶ——。伴信友『中外経緯伝』を引く。任字のニン—ジンや任那（ミマナ）・壬生（ミブ—ニブ）、n系海上＝ウナカミの訓、枕詞のn系ヌバタマとm系ムバタマなどを挙げ、n系m系の近似は認めるほかないという。

n系m系にかぎらない。口むろを開くまえに鼻むろから呼気が洩れる。呼気を出すときには、舌や口蓋垂をふくむ口むろ全体の粘膜が動員される。露伴のいう「本具音」は、五十音図が掬いきれなかった微妙な現象に名前を与えようとしたものであろう。「或音が発しられる場合の直前にその音が有つてゐる性質よりして発しられる幺微の音」である。

ゥマもしくはムマなど唇音のマ行バ行等の音が発せられるとき、その発音の前駆をなす音をかりに名づけたという。悉曇学の副産物ともいえる五十音図も、ン・ム・ウをめぐる本居宣長と上田秋成の仮名遣い論争も、露伴にはほとんど無用の論議であったろう。与謝蕪村の句を引いて外来語の梅（ウメ—ムメ）や馬（ウマ—ムマ）などに触れている。

梅咲きぬどれがむめじやらうめじややら　（几董編『蕪村句集』巻之上）

日本海沿いの若狭（福井県）小浜藩の伴信友が宣長没後の門人なら、同じ若狭の東条義門は宣長の学風をついだ真宗の僧侶である。おなじ時代に呼吸した信友と義門。信友の『中外経緯伝』と義門の音韻論『男信』とのあいだにはｎ系ｍ系の外来音について共通の関心、シラビーム方言に共通の関心があったのではなかろうか。

露伴が『音幻論』後半の各論を雑誌に発表したのは、昭和二十年夏の敗戦後である。

累音、対音、省音、添音、倒音、擬音、聯音

すべて年内の口述である。『音幻論』が幼児語・外来語（ｐｔｋなど）・オノマトペ（擬声語・擬態語）などにしばしば触れているのは、自然なことであったろう。

三河入道

いとこ同志であまりにかけちがってしまった二組の夫婦がある。大江定基夫婦と大江匡衡―赤染衛門と。そのありようを摂関期の群像から撰んでしまったところに、最後の小説「連環記」の創意が始まっていたのかもしれない。それはいつのころに溯るのであろうか。

幸田露伴は、口述で「連環記」を発表したとき満七十四歳を迎えようとしていた。老来病気がちであり、生来よくはない眼の性もそこねていた。初の文化勲章受章者、初の芸術院会員として傍目には華やかな晩年であったが、しかし露伴の家庭生活は死別や生別といったにがい思いをいくつも抱えていた。

先妻は二女一男を残して世を去り、後添えはその郷里の信州戸倉に別荘を造ってしまい二年前からまた別居し

ている。家事を見ていたのは先妻の忘れ形見、文である。文は家運を傾けた夫をささえ、夫を看護し、その手術回復のあとに女の子をひとり連れて婚家を去った身である。幼いとき姉を失い、手のかかった弟も病死していた。露伴の一家が住み慣れた向島の家も、次兄郡司成忠の北洋事業をたすけて甥への融資のかたに手放しており、その家庭はあまりしあわせとは言えなかったようである。明治の末から婦女子向けの文章を書き修養書を多く出した露伴の家庭の、これが実情であったようである。

しかし、作家の私生活をあなぐることには、どうも心がすすまない。露伴の文学はそういった次元をはるかに超えていたようだし、他人の私生活に立ち入ることが研究や言論にとってどんな意味あいがあるのか私にはよくわからないのである。

ともあれ「連環記」が慶滋保胤＝寂心から大江定基夫婦のいざこざに及んだあたりで、にわかに露伴の口調は下世話にくだけてくる。何かが露伴の内に起こったのであろうか。

一体女といふものほど太平の恩沢に狎されて増長するものは無く、又険しい世になれば、忽ち縮まつて小さくなる憐れなもので、少し面倒な時になると、江戸褄も糸瓜も有りはしない、モンペイはいてバケツ提げて、ヒッタコラ姿の気息ゼイく、御いたはしの御風情やと云ひたい様になるのであるが、（後略）

足腰あやしくなった露伴が日米開戦まえの東京市内で防空演習に加わったとは思えない。新聞紙上か小石川区表町の隣組かで消火訓練を見聞きした例え話であろう。要するに神さん連の棚卸しである。「一体」とひとからげにされ「女といふものほど」とくくられた世の女性にとって、あきらかにこれは暴言である。が、丈の高い江戸弁ではある。露伴が座布団に端座している。襖を開けた次の間で拝聴する形に向き合った日本評論社の下村亮

一あいてに悪態を展開する、襖のかげで記者が筆記する。奇妙な光景であろう。私は老・病・生・死の文学、近現代の文学に初めて現れた老年の文学を見てしまう。

こゝになると小説を書く者などは、浅はかな然し罪深いもので、そりやこそ、時至れりとばかり筆を揮つて、

有ること無いこと、見て来たやうに出たらめを描くのである。と云つて置いて、此以下少しばかり出たらめを描くが、それは全くでたらめであると思つていたゞきたい。但し出たらめを描くやうにさせた、即ち定基夫婦の別れ話は定基夫婦の実演した事である。

出たらめと実演との敷居を往き来する話法の妙は、前田愛「連環記」（『国文学』第19巻第3号、昭49・3）が小説の典拠をからめて頌詞を呈している。問題は、この小説でなにを省いたかであろう。その結果としてなにが露伴の創作として遺されたか、であろう。

かりにも関連すると思われる文献資料については松浦武「注釈『連環記』資料」（昭62・1・31　名古屋市立保育短期大学国語国文学教室）という労作がある。その典籍名と標目とのみをここに引き写すだけでこの一章をはみだすが、露伴に博引旁証は当たらない。

博引旁証は研究者の労に報いる形容であろう。若いころ路上で殴り倒されたあと、殴り方がアッパーカットというものであったことを確かめたという。一周忌の講演が武者小路実篤『幸田露伴』（1950・4・5　書林新甲鳥）に見える。凝り性の露伴が日宋の文苑に遊んだ末に大幅に省いたものがあったとすれば、その一つに藤原道長という存在があったろう。

露伴が道長を点出するまでの大筋をおさえよう。三河守定基は任地先で力寿の美に溺れて妻を去る。匡衡夫婦

と問答する出入りには露伴の「出たらめ」が加わって読ませるが、力寿の死後も定基は傍で昼夜を過ごし「口を吸ひたりけるに」あさましき香が出てきたあたりから語り口が澄んでくる。結句、定基は東山如意輪寺に走って寂心を師と仰いだ。

寂心は僧官などは受けなかつたやうだが、一世の崇仰を得たことは勿論であって、後には天が下を殆どおのが心のまゝにしたやうに謂はれ、おのれも寛仁の二年の冬には、自己満足の喜びの余りに「此世をば吾が世とぞおもふ望月のかけたることも無しとおもへば」と、実にケチな歌を詠んで好い気になつた藤原道長も、寂心を授戒の師と頼んだのであつた。（略）寂心は長保四年の十月に眠るが如く此世を去つたが、其の四十九日に当つて、道長が布施を為し、其諷誦文を大江匡衡が作つてゐる。そして其請状は寂照が記してゐる。

決め手は「ケチ」の一語にあったのかもしれない。露伴みずから嘲って「年を取るとケチになる。」（「ケチ」大9・10・1『現代』1・1のち「望樹記」）と書きだした文章もある。藤原実資は日記『小右記』にその十月十六日、道長邸の第三女威子立后の宴について「一家立三后。未曾有。」と記したあと、即興の「御歌優美」なり、返し歌などどうしてどうして、満座ただこの御歌を誦すべし、と申して元稹の菊の詩に楽天＝白居易が詩を和することなかった例をあげ、「諸卿饗（響）応」した。余もまた数度吟詠、太閤道長公も返し歌を責め求めることなく、「夜深月明」。酔客を扶けながら退出したとある。

実頼―小野宮流の嫡孫の右大臣がこの有様である。実頼の弟筋、兼輔―九条流の道長が現世の栄花を独り占め、衰老迫るとおのが極楽往生をこいねがう、その料簡がケチであったのかもしれない。対して、二十篇ほどの文と『日本極楽往生記』などを遺したにすぎない寂心に、浄土より帰って娑婆に在すという夢が伝えられている。

本来を云へば弥陀なり弥勒なりを頼んで、何かムニャムニャを唱へて、そして自分一人極楽世界へ転居して涼しい顔をしようと云ふのは、随分虫のいいことで、世の諺に謂ふ「雪隠で饅頭を食ふ」料簡、汚い、けちなことである。

道長は立后や立太子のつど、確かな「後見」つまり羽振りのいい外戚のあるなしを決め手にしたとされる（倉本一宏『摂関政治と王朝貴族』第三部第二章「『栄花物語』に見る「後見」について」）。だが肝腎の「後見」すべき女子や皇子が尽きたころから御堂関白の衰老が目立ち、仏事善業がしきりである。『栄花物語』の巻第十五「うたがひ」以降をたどってもよい。巻第卅「つるのはやし」では道長薨去のあと中宮威子が道長公からの御手紙で「下品下生」の往生と知らされ意外な思いをされる場面がある。極楽浄土最下等すれすれの往生である。もっとも匡衡―衛門夫婦の曾孫、大江匡房の『続本朝往生伝』には寂心や寂照の往生を伝え、寂照がいったん蘇生して「甚だ遺恨なり。下品下生ならくのみ」と言いおえて息をひきとった説話をも記している。が、露伴はそれに触れていない。

露伴の創意は、期せずして寂心―寂照の師弟を結節点にして前半で菅原氏を軸とする一世源氏の男子漢詩文の世界を往生伝・説話集によって描き、後半で大江氏を軸とする女房智巧歌の文苑を栄花物語・家集によって描いたところにあった。が、結果論であろう。寂心と恵心院の源信、寂照と増賀聖、それらの慈悲と勇猛、そして入滅を見れば足りる。

露伴の「連環記」は渡宋後の寂照に及び、源信に託された「台宗問目二十七条」を南湖の知礼に呈し権臣丁謂と相知る、その丁謂のみごとな死で結ぶが、入宋の奔然・寂照には触れながら、それにつづく成尋の消息や道長―

寂照の通信は省いており、そのことは王麗『宋代の中日交流史研究』（平14・8・1　勉誠出版）の各章と年表とによっても明かであろう。外交と交易との質がすでに変わっていたのである（榎本淳一「『小右記』に見える「渡海制について」――律令国家の対外方針とその変質――」）。

香　料

シュテファン＝ツヴァイクの『マゼラン』をみすず書房の全集で読んだときに冒頭で力説してあった香料の一件が記憶にあったせいか、幸田露伴が「連環記」（昭15・6～7月号、『日本評論』）の最後を宋の丁謂（ていい）の「天香伝」で結んでいたのが気になっていた。「連環記」は日本の摂関時代を背景に、慶滋（よししげ）保胤―寂心、大江定基―寂照、の二人を結節点にして群像を連環した小説だが丁謂は寂照が宋に渡った先のパトロンみたいな存在である。なぜその「天香伝」を持ち込んで、露伴は連環の大詰めで話をひろげてしまったのか。

ツヴァイク全集16の関楠雄・河原忠彦訳（1972・10・30）を見たら第一章「航海が必要である」がよみがえってきた。初めにスパイスありき、だった。イスラーム商人に独占されてジェノヴァに暴利をむさぼられていたヨーロッパが香料の道を求めて大西洋に船出する。ポルトガルのヴァスコ＝ダ＝ガマが喜望峰からインド洋の航路を開き、スペインのマゼランがブラジル沿岸を南下しつづけてホーン岬から西北にひろがる太平洋を望み見たという大航海時代。その発端が香料にあったとする序章である。

あとは「連環記」、丁謂のくだりを読むにかぎる。寂照が宋の真宗にまみえて円通大師の号をたまわったころ丁謂と「相知るに至った」と露伴は切り出して行を改めている。

丁謂は恐しいやうな、又然程でもないやうな人であるが、とにかく異色ある人だつたに違ひ無く、宋史の伝は之を貶するに過ぎてゐる嫌がある。道仏の教が世に出てから、道仏に倚るの人は、歴史には大抵善良でない人にされてゐると解するのが当る。（中略）楊億の談苑によれば、丁謂が寂照を供養したとある。すこし後にでた欧陽修・王安石・三蘇（蘇洵・蘇軾・蘇徹）の名におおわれて今は知る人もすくないが、法制よりも経済を重んじ、真宗の丞相にいたり、寇準の政敵として永いあいだ勝ち誇ったという。詩文、図画、奕棋、造営、音律、なにもかにもに通暁して茶や蹴鞠にまで通じていたか、「其詩が温公詩話と詩話総亀に見えてゐる」と述べてある。

真宗崩じて後、其后の悪みを受け（略）崖州に遠謫せられ、数年にして道州に徙され致仕して光州に居りて卒した。

寂照が日本に帰るべきところを留めて優遇したのは勢威日に盛んであつた丁謂であったという。寂照はそのまま呉に在って三十余年、仁宗の景祐元年（一〇三四）、わが後一条天皇の長元七年、和歌を遺して、「莞爾として微笑して終つた。」というのである。

だが、それに一年か二年先立つ丁謂の死で「連環記」を閉じた露伴は、前後する『蝸牛庵聯話』「茶」の条で、丁謂らがビスケット様の茶＝餅をはじめて製した功を述べている。（昭13・10月号〜昭16・6月号『中央公論』、昭18・1・25　単行本、中央公論社）

しかし沈香を産するの地に流された因縁で、天香伝一篇を著はして、恵を後人に貽つた。実に専ら香事を論賛したものは、天香伝が最初であって、そして今に伝はってゐるのである。

で、露伴は宋人魏泰の『東軒筆録』を引き、日宋に渉った「連環記」を閉じる。

曰く、丁晋公臨終前半月、已に食はず、但香を焚いて危坐し、黙して仏経を誦す、沈香の煎湯を以て時々少許を呷る、神識乱れず、衣冠を正し、奄然として化し去ると。

みごとな最期である。だが、王瑞来『宗代の皇帝家権力と士大夫政治』（2001・1・2　汲古書院）が示す「真宗朝大事年表」ではなぜか「景祐四年閏四月、（1037）丁謂没す」とある。評判も芳しくない。「本書の重点は丁謂の政治的言行である。」というとおり、宰相列伝の各章、特に第七章は〈「権臣」丁謂――君臣関係のケース・スタディー（五）――〉と題し、冦準を崖州に流した丁謂の凄腕を洗い立てる。もっとも、文人丁謂に関して池沢滋子『丁謂研究』（1998　巴蜀書社）を紹介し、「単純に是非の評価から抜け出して丁謂を具体的に研究すべきであると思うが」とつけ加えてはいる。

丁謂の評判は「奸臣」という一語に尽きたわけだが、むしろ私に見えてくるものは、この著者が「特筆したいのは」といいそえた、行財政における水際だった手腕である。

福建転運使としての官茶経営で示した茶法と財政管理。四川の五年間に蛮族の酋長に塩を与えて粟と交換し辺境の治安と駐屯軍の食糧問題を解決する。契丹あいてに黄河の舟人掌握して難民を渡し、捕縛したスパイを使って北方の勢力を敗走させる、などなど。

しかし著者によれば、「真宗朝になると、宋王朝自身が育成した士大夫は朝野に満ちあふれて、政治の支配者になっていた。」とあり、「皇権をつかんだある派閥は、遅かれ早かれ、敵対派閥に取って代わり、新たな君臣協力下の宰輔専政が形成されてゆくのである。」（第五章）ともある。その士大夫層の正論なるものがくせ者であろ

う。功罪について宮崎市定「宋代の士風」（『史学雑誌』第六二編第二号）に示唆をえて思うことがある。

私は迫持という古風なことばを思いうかべた。石やレンガを互いにせり合わせて、足場もないところにアーチを築き上げる建築が、どこか宋王朝の危なっかしい言説の馴れ合いを思わせる。王朝内部だけではない。契丹―遼―金と入れ替わる北方の王朝との迫持が、いずれモンゴルに征服されるまでの安楽をかすめさせたのではあるまいか。

朱熹の『宋名臣言行録』に影も見せない「奸臣」ながら、丁謂には塞外を直視する抜群の国際感覚があったのではないか。たとえば寂照への待遇、四川の処理、福建の財政、崖州での「天香伝」――。崖州は、海南島の取っ付きに見える地名である。

露伴が「連環記」を『日本評論』の昭和一五年六月号・七月号に載せたころは海南島のあたりはすっかりきな臭くなって、九月には日本軍が当時の仏印国境に進駐している。仏領印度支那の略、いまのヴェトナムである。もっとも、崖州から海南島や時局を連想させるつもりは露伴になかったろう。あえて古風な南蛮の崖の州で通している。

しかし露伴の連環は閉じていたわけではない。その翌々年に山田憲太郎『東亜香料史』（昭17・5　同朋社）が出ており、再刊本（1979・3・1）を通読したとき、崖州のかなたに香料の道が、明の鄭和やヴァスコ＝ダ＝ガマのはるか以前に繰り広げられていたのを目の当たりにして、あっけにとられた。露伴が「連環記」を丁謂の「天香伝」まで運んだ意味あい、時局に触れなかった心境がたちまち納得できたように感じられたのである。

敗戦後に『東亜香料史』は稀書、珍書になってしまったと序にある。著者は昭和五二年（1956）六月に日本学

士院賞を受賞した。その大著はそのご手にしないが、おなじ著者の『香料博物事典』（1979・12・1　同朋社）を手に「連環記」の作者を思うことがある。

第一章　東アジアの香　第二章　泰西の香料　第三章　樹脂系香料四題　第四章　竜脳と樟脳　第五章　檀香（サンタル）　第六章　胡椒（ペッパー）　第七章　丁香（クローブ）　第八章　肉荳蔻（ナツメッグ）と荳蔻花（メース）　第九章　肉桂（シナモンとカッシア）　第十章　竜涎香（アンバル）

香料の種類ごとで章に分けてあり、随所に展開するのは香料をめぐる南アジアの経済交流である。あの宋王朝の台所、迫持の足場をまかなった商人たちが、イスラーム世界を舞台にして次から次へと登場する。その動きを「附録」の地図で追いながら、船乗りたちの目に映った南海に思いをはせた。大航海時代のものながらリンスホーテン『東方案内図』（一五九六、アムステルダム出版）から影印した原寸大の三枚――、「アフリカ東海岸　マダカスカル島図」「アラビア・ペルシア・インド図」「東アジア図」は、その順にゆがみが増してインドネシアが大きく詳しく、海南島も載せてある。秀吉・家康のころの日本は Firando 平戸など九州の入江や XICOCA 四国島の奥に直立し、まるでミジンコである。

著者は第一章「東アジアの香」を中心に丁謂「天香伝」、海南島、鑑真漂着、わが香道、露伴の著作二篇にも触れる。その一つは段成式の『西陽雑俎（ゆうようざつそ）』によって玄宗の囲碁にまつわる瑞竜脳の故事を伝える「楊貴妃と香」である。「香談」（『中央公論』昭8・1月号）で語彙を考証した露伴でもあった。その「連環記」に丁謂も瞑すべし。

顧炎武

厳母、という言い方はないようである。かりにあったとしても、顧炎武の母、この人は並みの厳母でない。幸田露伴の「顧炎武」を『露伴全集』第三十巻で読んだときの最初の感想がそれであった。明末清初の大学者とか『日知録』の著者で清朝考証学や音韻学の祖、万暦四一年（1613）生まれ、といった顧炎武の位置づけはあとで知ったことである。

顧炎武は顧同応という人の次男坊だが、生まれおちるとすぐ、おじいさんの顧紹芳の次弟つまり大叔父顧紹芾の養孫とされた。紹芾のむすこ顧同吉が亡くなったので、その従兄弟の次男にあたる赤ん坊を跡継ぎにしたのであろう。亡き同吉の妻にあたる王氏が赤ん坊を養ったという次第だが、この王氏が並みの厳母でなかった。露伴の文章で見よう。

顧炎武字は寧人、林亭と号す。呉の昆山花浦村の人、顧同応の仲子なり。同族の顧同吉、王氏を聘しけるが、未だ婚するに及ばず卒しけるに、王氏は聘を受けたるの故を以て、節を守つて改嫁せず、同応の子の絳を襁褓の中に養ひて、之が後となしぬ。絳は即ち炎武にして、崇禎十六年京陥るの後、名を炎武とは改めしなり。（「顧炎武」『新修養』大五・一月号、初めの題は「明末の英雄顧炎武」）

簡にして要をえているが、当時としても堅い文章であったろう。井上進『顧炎武』の叙述にしたがって王氏が嫁入りした事情をもう一度なぞってみる。ちなみに同書は竺沙雅章・衣川強監修〈中国歴史人物選〉の第十巻（1994・8・20　白帝社）にあたる。

だがいよいよ結婚という時になって、同吉は病気になり、そのまま死んでしまった。（略）ところが十七歳の王氏は、その伝記によれば、結婚の日取りまで決めた以上、私はもう顧家の嫁ですと言いはり、とうとう新郎のいない家に自ら嫁入りしてしまった。いくら当時でも、さすがにこのようなことは人情の自然にそむくことで、紹芾もその妻も止めたのであるが、王氏の意志は変わらなかった、という。

未婚の押しかけ未亡人である。二十八歳で義母となり、赤ん坊の絳を育て上げ、幼年のころから『小学』や『大学』を教えたという。亡き同吉の祖父と王氏の祖父とが同年の進士、つまり高等官資格試験の最上級を同じ年に合格したという毛並みのよさである。

科挙という高等官資格試験制度は隋の時代から起こり、明の時代は地方の入学試験に受かった生員から先が難関だった。省での郷試に受かって挙人となり、天子のお膝元北京での会試に受かったあと、殿中で天子じきじきに行う殿試に受かれば最上級の進士である。　しかし十四歳のとき祖父の手回しで生員の資格を買ってもらったあとの絳は郷試に三度四度と落第をくりかえしている。儒学経典の丸暗記と作文技術の習得といった、いわゆる受験対策の常識をはなから無視したような祖父の「実学」教育のせいだったようである。

一には時勢の多事なるを思ひ、遂に試に応じて官に挙げらるゝことを願はず、山中に屏居して、経済実用の学を治めける。

と露伴がいうのには結果論の気味もあるが、その性根と面魂とは言いあてているようだ。

ただし母が教えた経学は南宋の朱子学であったろう。その一方で祖父が当時の新聞―邸報をまじえて諭したのは兵学や史学である。観念論と実際学との潮境で絳は落第をくりかえす。成人して字（あざな）を寧人と名乗り林亭と号し

てまごついているうちに、義母の王氏のほうが崇禎九年（1636）「節孝を以て閭に旌すの典を得たり」といった具合に表彰されている。

北京が賊の手に落ちたのち名を炎武と改め、生員の結社の一員として明朝の立て直しに奔走し、明の弘光元年（一六四五）、清の順治元年に明王朝に殉じる母の絶食死を迎えた。

炎武の母はもとより烈女なり、明の祚の当に絶えんとするを見るや、慨然として歎じて、我婦人と雖国恩を受く、今これ何の時ぞや、我則之に死せんとて、食わずして死しぬ。時に其の年六十。終に望みて顧炎武を誡めて、吾が家世々明の禄を食めり、必ず二姓に仕ふること勿れと遺言しぬ。

明の滅亡以後、清に仕えなかった炎武は遺産争いにまきこまれ安住の地がなくなった。

遂に北は燕趙に遊び、東は斉魯に至り、復一たび里に帰りて、東は会稽に至り、又太原大同に由り、西の方関中に至り、直ちに楡林に至りぬ。禍凶は猶其の手を斂めず、

この逆境で炎武の経済実用の学は形をなしてくる。その事情を露伴はつぎのように見る。

炎武の遊歴する、毎に二馬二騾を以て書を載せて自ら随へ、嶮要の地に至れば、老兵退卒を呼び出して詳しく詢ひ糺し、地勢路駅、或は識るところ聞くところ合せざれば、書を発いて勘考し、必ず実を得るに至つて而して後已みぬ。

要するに、中国全土にわたる歴史地理に関する、私設移動図書館つき実地踏査である。

天下群国利病書百二十巻、肇域記百巻、歴代帝王宅京記二十巻、十九陵図志六巻等

をはじめとする多くの歴史地理に関する書はこうして成った、と露伴はいう。また、こうもいう。

鞍上に於て易経詩経より礼記に至るまでの諸経注疏等を黙誦して、忘れたることあれば書を発いて之を反復熟読し、牢として暗記するに至って乃ち已みしといふ。

このようにして成った『日知録』三十二巻や『音学五書』と総称される『音論』三巻・『詩本音』十巻・『易音』三巻・『唐韻正』二十巻・『古音表』二巻などについて、とやかく言う資格は私にない。後ろめたさから字面に目をはしらせてみたことがあるが、かい撫で、というほかない。ただし露伴最晩年の『音幻論』（昭二十二・五・三十、洗心書林）に一箇所だけ顧炎武の名が出ていることから、露伴の理解がさらに深まったことを感じている。

大正五年一月号『新修養』（未見）にのったという原題「明末の英雄顧炎武」（1916）と『音幻論』に収められた原題「韵—音幻論の一部—」（昭20・1・1『文芸』2巻1号—1945）との間には約三十年の年月がながれている。かつて露伴はこう言った——。

敢然として我が為さんと欲するところを為して、我が為さんと欲せざるところを為さざるは、炎武の性質自から然るところにして、而して炎武の学の大成せる所以ならずばあらず。

異民族支配下に独往する考証学者・博物学者の像。だが、『音幻論』「韵」に見えるのは漢族の音韻に思いを潜める先人である。露伴は日本の音韻を語るつごうから中国の「韵」に触れたのであり、顧炎武の主著『音学五書』に沈潜したその年輪が思われる。

故に支那で音を論ずる場合、古韵を論ずるのが一つ、詩韵を論ずるのが一つ、詞の韵を論ずるのが一つとなって来たのである。

いま、中国語音韻論を藤堂明保・馬淵和夫・頼惟勤・水谷真成・尾崎雄二郎・三根谷徹の諸家に教わりながら顧みると、ここに元劇の詞を読み込んだ露伴独自の見識もあるようだ。

韵といふことは自然にあることはあるものだが、韵の詮議は後になつて起つて来たので、それは言語の発達した国の印度の文明が伝播して来た為にだん〳〵委しさを増して来たのであつて、古い支那の詩などにある韵は後世の韵よりも甚だ寛大である。詩経の詩の韵を探ねると外れのものが韵として用ゐてあるので、そこで叶韵の説が唱へられて大儒の朱子なども採り用ゐたのである。しかし又その後の学者の顧炎武などが、いやさうではない叶韵ではなしに古代本来はかうであつたのだといふ意見を立て、呉才老の叶韵の説は破るゝに至つたが、（略）

「以上は支那に於ける音韵全体の大観であるが、」という口述に、顧炎武の『音論』を消化しきった露伴三十年の経歴が遠望できる。なんで三十年に限られよう。露伴も、生涯の最後に敗戦と占領下の日々を『音幻論』口述に傾けた人であり、顧炎武が『音学五書』の「後序」にいう「予纂此書幾三十年」が露伴に重なって見える。『音学五書』の筆頭に『音書』を置き、「先之以音論何也曰審音学之源流也」と言い切るまでに費やした半生。まことに顧炎武は、音韻を審らかにする小学こそは学の源流である、と言い切っている。

明末清初には、南北格差、天子制、科挙、士大夫の党争、異民族支配、四庫全書と禁書、儒学の変質、など問題が多い。わずかに、桑原隲蔵「歴史上より観たる南北支那」・濱久雄『明夷待訪録』・宮崎市定「宋代の士風」・濱口富士雄『清代考拠学の思想史的研究』・木下鉄矢『清朝考証学』とその時代』・井上進『顧炎武』から、露伴を思うのみ。

浦島子

男は遠い楽園から帰ってきた。相愛の王女から別れしなにタブーの小箱をもらった。故郷で時間の落差に見舞われた――。まことに単純な構図である。日本では浦島の話などだれでも知っている。話の筋を蒸し返すのに気がひけるほどである。発端や道中の方法は話によってさまざま。楽園の様子や帰る理由、故郷の実際、それもさまざま。男の名も、浦嶼子（うらしまのこ）・浦嶼子（うらしまのこ）・浦島子（うらしまこ）・浦島・浦島太郎と変わった。しかし、構図は単純である。

かいつまんでしまえば、秘境への往還、タブーの箱、時間の落差、の三つであろう。しかし話のおおくは秘境への往還、要するに楽園幻想―あこがれであり、タブーの箱の中身や時間の落差については、踏み込んだ展開をしていない。せいぜい不在の年数を加減するだけ。男を衰老に追い込むか神仙・神仏に祭り上げるかで、その先がない。

楽園と往還こそが肝要、あとはお前が勝手に区分したのだろうと言われればそれまでだが、タブーの箱と時間の落差、これ抜きでは浦島の話が成り立たないことも確かだろう。

タブーや時間にまで踏み込んだ展開は、明治以後の近代文学から始まったようであり、その早いあたりに幸田露伴の「新浦島」（新聞『国会』明28・1・3〜30連載）が位置する。ただし、なぜ明治以降にそうした動きが起こったのか、それを見るためにも、古来の楽園幻想がどのようなものであったのか見とどけるのが順序かもしれない。

手順として神話 myth・伝説 legend・説話 folk-tale を使い分けたい。浦島説話は民俗学でいう昔話、伝説は

実在と信じる人物の事績を現実の事象と関連させる伝承、神話は超時空超論理の想像力で神や英雄や超自然の聖なる意義を示す伝承、というつもりである。

ただし、重松明久『浦島子伝』（1981　古典文庫55　1981・1・24　現代思潮社）が露伴を視野に入れつつ「浦島伝説の性格とその変容」としているのでしばらく〈伝説〉にしたがおう。

露伴は「神仙道の一先人」「道教について」「墨子」「芳野の仙女」などの論考をのこしており、神仙思想の研究に多くの業績をもつ。（「解説」）

重松著によれば浦島伝説は奈良時代までにおそらく三系統が出現していたろうという。

①単純な神仙思想のみえる『風土記』系

②竜神信仰―海人系海宮遊幸説話（藤原浜成）の『万葉集』系

③道教風の『古事談』所収「浦島子伝」系

かりに時代順に番号をふったが、重松著は①③について蓬莱山・亀・仙薬、の要素に分解して浦島子が楽土に淹留（えんりゅう）した様相を吟味する。淹留、すなわち淹（ひさし）く留まる意。重松説の吟味は③に集中し、高木敏雄・松村武雄という神話学の二先人があげる怪異譚をたどって中国六朝時代に行きつく一方、柿村重松説を引いて『文選（もんぜん）』の洛神賦―『古事談』の系譜に注意する。

結論――、浦島伝説本来は、陶淵明作に仮託された『搜神後記』の系譜をうける海宮往訪譚（たん）にあり、室町期からはじまった竜宮譚も、『古事談』本から『文選』にさかのぼり、道教風である。いちばん古風に見えた②『万葉集』系は意外にも孤立している。

つまり先人諸家いずれも文献史料としては『日本書紀』雄略紀二十二年の条に始まり、その注釈書『釈日本紀』十二の注が引く逸文『丹後風土記』の伝承に行きつく。では、そもそも①『風土記』系の単純な神仙思想を伝えた背景はなんであろうか。

浦島伝説は、伊勢における宇治土公猿女君との関係をモチーフとして、恐らく宇治土公の出身地と思われる丹後与謝郡辺りの地において、直接的には宇治土公の出自氏族と思われる日置氏らにより、原初的に構想されたものであろう。

重松著の「浦島伝説の宗教的背景」にあるこの推定を端緒にして、日本海側の丹後を本拠にして太平洋側の伊勢猿女君と結びついた宇治土公という勢力を思ったことがある。早い話が、武光誠・山岸良二編『原始・古代の日本海文化』（2000・10・10　同成社）に寄せた諸論考が示すように、原始・古代の日本海は遠方に先進文化や楽園を幻視してもおかしくはない海上交通と防衛の表舞台であった。たとえば第Ⅰ部の考古編を見てもよい。

重松著にある宇治土公という苗字のお方を現に存じ上げており、宇治という名には含蓄がある。猿女君もアマノウズメノミコトと猿田彦に始まる神話以来の家筋である。これ以上の憶測はひかえたいが、少なくとも浦島説話の発祥地として、丹後与謝郡は浦・嶼といった地勢からも納得できる土地である。参考に第Ⅱ部の古代史編をあげておこう。

隠岐の氏族・部民と畿内政権（加藤謙吉）、古代出雲の位置（神田典城）、出雲神宝と物部氏（武光誠）、出雲国風土記のなかの越（瀧音能之）、令制の地域性と越後国（菊池克美）

近年は考古学に加えて木簡史料が動員されるようになり、氏族の動向にかかわる行政の実際や、古墳・製鉄・

埴土・製塩など先進技術のありようが具体的に推定できるようになってきた。浦島説話伝承の始源をさぐる意欲的な論考も見られる。

町方和夫「浦島伝説の「船」――言語伝承における素材「埴土船」の変容」（古代文学会編〈シリーズ・古代の文学5〉『伝承と変容』昭55・2・21　武蔵野書院）

③の道教風『古事談』所収「浦島子伝」系はやがて浦島太郎を形成する系列であろう。林晃平『浦島伝説の研究』（平13・2・28　おうふう）の考証によれば、『続浦島子伝記』（群書類従百三十五）など説話集や歌学書から御伽草子にいたる系譜が考えられる。

②の『万葉集』系とは、高橋虫麻呂の「詠二水江浦嶋子一一首并短歌」（巻九・一七四〇～一七四一）にほかならない。「海若神之女尓」結ばれ、「二人入居而」「常世邊可レ住物乎」と詠んだとおり竜神信仰―海人系海宮遊幸説話であり、「劔刀己之行柄於曾也是君」、それをフイにした浦島子を失楽園の愚人扱いしている。不比等の三男宇合の幕僚として虫麻呂が藤原氏にちなむ常陸や住吉の説話にくわしいことは知られている。

以上、先人諸家の考証を概括したり省略したりで次へうつるのは心苦しい限りだが、①の『風土記』系にあった「為人姿容秀美。風流無類。」（『釈日本紀』十二所収「丹後風土記」逸文）の内容に諸家ほとんど触れていない。重松著でも「人と為り、姿容美しく、風流なること類なかりき。」と読み下したまま、風流の内容を『遊仙窟』にゆだねている。

『遊仙窟』は、唐の張鷟（文成）が著した伝奇小説である。主人公が神仙窟に迷い込み仙女二人から一夜の歓待をうける――。奈良期に伝来して王朝人に偏好され、作者と則天武后との情事だとする俗説まで行われた。四

十代はじめの露伴に考証「遊仙窟」（『蝸牛庵夜譚』所収、明40・11　春陽堂）がある。武后の俗説にも触れて相伝と誤伝とを検討し、我が邦に長く伝わり彼の邦に早く逸したことを「是も亦奇なる哉」として結んでいる。

だが露伴の風流は考証で納まっておられる問題ではなかったろう。登場作『露団々』中の風流以来、二十代に小説「風流魔」「風流艶魔伝」「風流仏」「呵風流」「風流微塵蔵」など立てつづけに出した末の「新浦島」である。タブーと時間とに踏み込んだ風流が問われよう。太郎の弟の末裔として玉手筥と釣竿と代々の譲り状とを受けた百代目次郎は両親の柩に遺った紅白の舎利に仙道を賭ける。そんな執心を大魔王に見抜かれて宝剣で両断された末、分身の手で三年ごと、女人も及ばぬ生死の外の化石に封じ込められてしまう。

浦島説話が幻想だとすると、その淵源となった陶淵明『桃花源記』の風流が思われる。権力が及ばない、塩・鉄・酒にこと欠かない、歴史がない（大室幹夫）。だが、魏王朝を奪った晋王朝の現実はけわしく、士太夫のおおくは男性本位の談理と隠逸に逃避した。

ならば、楽園はなにも道教風の蓬莱山や仏教風の浄土や補陀洛、民俗学の黒潮幻想（柳田国男・折口信夫）の南島や、山のあなたに限ったものではあるまい。

幕末の黒船から、列島弧における説話の三類型は変質した。楽園へもどる羽衣型、楽園から帰郷する浦島型、楽園から来臨したなりの三輪山型だけではない。すでに漂流・留学・移民・引揚げ・棄民・抑留・拉致・在日――を経験している現在、教育の場をふくめて幸堂得知・透谷・露伴・巌谷小波・逍遥・鷗外・武者小路から筒井康隆・栗本薫・坂田千鶴子に及ぶ新しい浦島説話、海外との比較（長田ふみと）は勢いであろう。

いさなとり

幸田露伴の長篇連載小説で唯一完結した「いさなとり」に、十七世紀末からヨーロッパではやったピカレスク小説 picaresque novel の名をあててもよいだろうか。ピカロ picaro はもとスペイン語でごろつき・悪党・悪漢・ならず者・放浪者、こずるい・あくどい・破廉恥・無頼、ろくな意味が辞書にでてこない。これでは彦右衛門、かわいそうである。両親がなく下田の叔父の店をとびだして遍歴はしたが、こざかしいまねはしていない。

ゲーテの『ヴィルヘルム＝マイスター』流に教養小説 Biludingsroman はどうだろうか。鯨取りはともかく、姦通や殺人や棄て子を教養・徒弟修業といえるものであろうか。

幕末維新期に彦右衛門は不在だった。京都からも逃れて平戸沖の生月島や壱岐の海上にいた。漂流して朝鮮にいたこともある。身寄りも知人も今はない伊豆の蓮台寺村に帰り、悔いのおおい三十年余を胸にたたんでさらに二十年、女嫌いで晩婚の徳望家に納まった封じ目がほつれだしたのが数えで六十五歳。連載の「第一　無事の光」がそこから始まる。

数年後、娘婿となった少壮政治家の引き合わせによって彦右衛門は、海軍士官に成長したわが子荒磯大尉に名乗り出て、「語るも聞くも涙にて」長い長い懺悔をする（第百）。

それより天蒼く日鮮かに、頭上一点の翳なく彦右衛門一代を終りけるよし、めでたし〳〵。

当時二十五歳の作者が百回の連載（新聞『国会』明24・5・19〜11・6）をささえた工夫はなんであったろうか。一代分限が秘めるいわくありげな過去を解き明かす探偵趣味もあったろう。数え十四で出奔。背徳と殺戮の

時を、露伴は今風の浦島が子（第九十四）の胸に封じ込め、ごく平凡な妻をめとらせて小さな桃源郷を南伊豆に営ませた。

その封じ目を解く糸口は、十五になる一人娘のお染が新聞で帝国軍艦千早を縦覧できると知って見たいといったことにある。主人公がわが無筆を悔いて娘の読み書きを喜び雑誌や新刊書を好んで与えていたという設定に、すでに懺悔は始まっていたのかもしれない。

だが、東京見物や横浜での軍艦縦覧はいい、そもそも家出少年に無鉄砲な旅などできたのだろうか。お伊勢への抜け参りが大流行し、生月の捕鯨が最盛期にあったのである。

掲載は二、三日に一章。章ごとに字数を塩梅して山をこしらえる。主人公が出逢う所と人とを適宜きりかえるのは、幕末維新期を経験した読者にとって不自然なことではない。各地を主人公にたどらせ風俗を紹介することも全国紙に必要な配慮であったろう。

所を変えるなら膝栗毛型、人を変えるなら浮世風呂型。水戸黄門や遠山の金さんを思ってもいい。通俗小説やラジオ・映画・テレビのドラマで今も愛好される手法である。

納屋の轆轤に綱くりかけて大背美鯨まくのにや暇もない、いよ暇もない、子持まくのにや暇もなや

（第十二　芸妓殺しの轆轤踊り）

軍艦千早で声をかけてきた老水夫と水入らず、その夜「網戸の親父の彦」と三次の昔にかえり、艦上で見かけた青年士官の消息を連絡してくれよと頼んだ、そのあとの踊りである。

だが肝腎なのは、時と所と人とを百回つらぬいて彦右衛門を動かしたものであろう。かりにそれを、ケチを忌

み嫌う性分だとすれば、その潔癖を与えたのは露伴である。

仮にも吝嗇する事嫌ひに大袈裟な事ばかり好み（第八）

鄙な根性出す奴と悪く評判されても（第十）

我が何時其様な鄙吝な事為た（第十九）

我は万年寺通りの小な数珠屋（第二十）

彦右衛門生れついて卑劣なること邪曲なること大の嫌ひなるより（第八十二）

天地を卑小な根性より恨しく忌はしく考へ（第八十四）

逃げたり隠れたり狭小なことを仕ないで何故我には相談をかけなかつた（第九十一）

独を善くする狭隘な思案ながら（第九十三）

第二十の例を別にして彦右衛門の性分がケチの対極にあることを語るものばかりである。小説「夜の雪」（『太陽』4巻1号、明31・1・1）でも両親をなくした少年が、自分名義の財産を横取りしようとする養父母の魂胆を知って「厭だなあ。」「けちな御父様だ。」と口気烈しく、勢い鋭くさげすんで家出する場面がある。晩年の「連環記」（『日本評論』16巻4号、昭16・4・1）でも二か所ケチが使われ、つぎのように評している。

世の諺に謂ふ「雪隠で饅頭を食ふ」料簡、汚い、けちなことである。

だが、ケチの対極にあるものが彦右衛門には見当つかない。読者にも言いようがないものであろう。潔癖な分だけ自他のケチが気に障って行く先々で悪人善人に出くわす。悪玉は、こざかしい小人・女人、善玉は寺参りの老人か和尚。わずかに各人物の弱さと陰翳、主人公の苦悩と幻覚と成長、それらが草双紙めいた因果応報譚から

作品を救っている。

悪人〔京都〕染物屋の家付き女房お俊（夫は庄兵衛＝佐十郎の甥）
〔広島〕銀次郎の婿入り先の母親　その情人の無頼漢
〔生月〕羽指の金四郎　彦右衛門の女房お新（前夫は伝太郎）　その継母
善人〔京都〕数珠屋の佐十郎　その次男惣五（出奔先の生月より帰省、のち帰郷）
〔広島〕和尚　木賃宿の亭主　算盤屋（銀次郎の元雇い主）
〔生月・壱岐〕松富の隠居　羽指の権左衛門（彦右衛門をきびしく仕込む）

彦右衛門は抜け参りのあと、京都で奉公先のお俊に身を汚されて逃げだし、広島で知人の婿入り先の婆の情人を成敗し、生月では金四郎を抑え、わが女房不義三昧の場で前夫・義母とも三人を斬り殺したあと小児に手を下しかねて断崖から共に身を投げてもいる。

それに対して数珠屋の老人佐十郎は甥の婿入り先に彦右衛門を世話し、次男惣五の縁で生月行きのきっかけを作っている。広島の和尚は手元の薬―紫雪と布施とを与え、行き倒れ先の木賃宿の亭主はそれなりの親切気から算盤屋の奉公口をさがしてくれた。

だが各人の内言と外言が毎章を語り、身勝手な理屈もないではない。死にそこねたあと小児を小船にくくって心当ての浦へと押し出した彦右衛門。当てにした壱岐の知人にまで死なれた彼をその知人の墓地で探し当てた松富の隠居。双方の言い分を並べてみよう。

時移っては汝が為ならず、此潮に乗り風出ぬ中、天の命ずるところに行け、落着く先は慥に某所と我は籌

れど、中途にて如何なり行くかは我が智に及ばず、行け、汝の運は汝に在り、生長なさば汝の勝手、汝が母殺せし我を恨まば刃物を持つて尋ねても来よ、汝を助けし我を知るとも報を我は求めぬぞよ、天道まかせ汝任せ、如何なとならばなつて亡せよと、烈しく沖に突き出せば潮に取られて流れ行く船は、水煙茫々の中に隠れて見えずなるを、見送つて後少時は泣きしが涙を払つて、

［彦右衛門］

我最早此日本に居り難し、朝鮮に漂着し、とど壱岐の知人を弔っていた彦右衛門である。

天晴柔しい情をもつてゐる男かな、苦労は相応にして来ても未だ世の塩も砂糖も余計嘗めぬだけあつて考慮が微弱いは、（略）汝が汚穢い動物二三疋殺したは当然の事、少しも苦にするにはあたらぬは、誰に聞かしたとて汝が道理といふであらう、ハ、、、何な仔細かとおもへば何でも無いこと、惜しいことに小児は棄てずであつたを、それも疑がはしく思つたれば棄てたも却つて好かつたかも知れぬ、苦にするな苦にするな、生月一島は先づ我が何とでも出来る、（第九十二　好いは）

［松富の隠者］

西海道の西端、生月島とその外洋は益富組の世界、小説では松富組の治外法権にあったとするものである。露伴は、松浦氏・宗氏ら藩の権力も国禁も直接には及ばない生月・壱岐の海鳴りを背景に、ケチをさげすむ男児をよみがえらせた。風流という文字をまったく使わない風流の文学。「第六十六　浪湧き風腥し」など海洋文学の雄といってよいだろう。

作者は権力の動向にふれなかった。かりに主人公が文政十年（1821）生まれとして、天保の改革、大飢饉、大塩の乱、隠れキリシタン、黒船、御一新、いっさいが欠落している。あえて欠落させたのだろうか。歴史よりも地理。ことに京都の町方の職人と風儀、とくに生月島のマニファクチャー（工場制手工業）。いずれも丹念に調

べたあとがうかがわれる。

うゐのおくやま

いろは四十八奥山こえて――、幼いころそんな流行り歌のひと節を耳にとめたことがある。やや長じて赤穂四十七士とか「仮名手本忠臣蔵」とかを耳にするようになった。

教室のうしろの黒板に書いてあったイロハのうち「ケフ」が今日という意味に読めてよろこんだり、習字のお手本「タグレ秋ノ風」を〈タグレ秋ノ風〉と読んで秋風に凧糸をたぐる少年を想像して授業はじめの朗読で顔赤らめることになったり、頑是ない話である。

むかしアイウエ王とカキクケ公とサシスセ僧が、という五十音図をかりた話を聞いてオ列の音を長く延ばすのをふしぎだと思わなかった反面、いろは四十七と四十八、どっちが本当なのだろうかと疑ったのは仮名遣いについてハテナと思ったはじまりであろう。

いろはにほへと　ちりぬるを　わかよたれそ　つねならむ
うゐのおくやま　けふこえて　あさきゆめみし　えひもせす

「ヨタレ／ソツネ」といった読み方はしなくなり、七五調になじんで信時潔の曲が心に残った。が、なにか引っかかる。①ハ行のふしぎな発音、②ヤ行ワ行のダブり、③濁点ぬき、④キョウという変な読み方、⑤ン・ムのあるなし――。みんな謎のままであった。

幸田露伴の『音幻論』（昭22・5・30　洗心書林）を読み、幼いころの幼い謎がよみがえった。声音を「韵―

声」と見るなど、世の「母音―子音」とは違っていたからであろう。

韵＝アイウエオ＋中国入声（にっしょう）ｐ・ｔ・ｋ　フクツキチ＋陽類ンム＋古代インド別摩多（べつまた）ル

しかも「声」が捉えにくい。インドや中国の音韻を踏まえたのか、本邦の仮名遣い論議に素っ気なく、世の文法書や国語学書とは力の入れどころが違うのである。例えば、

ア・ヤ・ワ・ハ各行、脣音・喉音・舌音や半舌音、半舌半顎（がく）の音（サ行―タ行、ことにシ―チ）、前後の韵と声とが響きあう幻性＝聯音、などなど

聯音というのは〈連声（れんじょう）・連濁・ガ行音の硬軟・音便・長音・拗音（ようおん）・鼻音・入声〉にわたるらしい。あと「累音・対音・省音・添音・倒音・擬音」を立てて語例が豊富である。

露伴の「韵」はインド渡来の仏教でいう摩多（また）（母音）・別摩多（べつまた）に近く、「声」は体文（たいもん）（子音）に近いものではなかろうかと考え、種智院大学密教学会編『実習梵字（ぼんじ）テキスト』（昭59・6・31　昭61・4・20　初版二刷、小関貴久）をたよりに、つぎの書をたどってみた。

田久保周誉著、金山正好補筆『梵字悉曇（しったん）』（1981・10・3初版、1986・3・20　五版　平河出版社）「後篇　悉曇の解説　悉曇字母の分類　悉曇字音の発音　悉曇連声」

露伴はいう、「支那は大体文字の国」、「印度は言語の国」、「我が国は印度と似てやはり言語の国ではあるが、単音の国である支那が介在してゐて」、「支那で音のやかましい事を言ひだしたのは印度の仏教がその地へ流れ込んだ後、即漢の末からである。」など。音声は呼気の副産物だから、閉ざした粘膜質の口むろ・鼻むろを開いて舌と唇を立体的に運動させる以上は、ｐ・ｔ・ｋもｎｍもｒｌも「韵」に属して、母音に先立つのだろうか。

もっとも露伴は梵字や中国音韻の話は手早く切り上げている。五十音図に移ろう。

馬淵和夫『増訂　日本韻学史の研究』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（昭59・11・30　臨川書店）や『五十音図の話』（1993・7・1　大修館書店）によると、その由来はインド仏教の音韻にあるという。文字化し規則的に配列した「悉曇章」が真言系と天台系とに伝来し、天台宗の学僧明覚（1056〜1106？）が大成して中国伝統の反切（標音法）を理解する『反音作法』として作ったが、重宝すぎて音韻・仮名・語法、特に仮名遣いに威を振るった。

その五十音図や仮名遣いはさておき、気になるのは昭和初期の日本語音韻論の、とくに〈上代特殊仮名遣〉に山田孝雄や露伴が一言も触れていないことである。疎かったわけではない。

仮名の成立については大矢透といふひとが調べられたのが大変丁寧に出来てゐる。一番宜しいと思ひます。

（『音幻論』附録「言語と文字の間の溝」（昭13・9　『文学』〈岩波書店編輯部記者、羽仁五郎〉）

そこで、一から出直すつもりで明治の仮名遣い研究、草分け時代をたどってみた。

太田晶二郎「大矢透博士の著書稿本刊本及び蔵書――伝記的書目――」（平3・8・10　吉川弘文館）もと『東京大学史料編纂所報』第五号（昭46・3）に発表したもの。列島弧の「仮名の成立」にかかわる「伝記的書目」でもある。その「補注三」に引く「自家履歴」を見よう。

同（〇明治十七）年九月茨城県第二中学一等助教諭十九年九月茨城第二中学廃セラレ、十二月上京、文部省編輯局詰ヲ拝命シ、二十年判任六等ニ叙セラレ二十一年非職二十三年台湾総督府編輯事務ヲ嘱託セラレ、台湾方言ヲ調査シ、台湾小学ノ教科書ヲ編輯セリ。

明治十九年、三十七歳の大矢透が文部省編輯局長伊沢修二と出会い、異民族に対する国語教育から列島弧全体

の国語政策にかかわる。明治三十五年（1908）五月臨時仮名遣調査委員会の補助委員拝命にいたる出会いである。古い経典に施した傍訓のほかに訓読用の記号―訓点が白墨で記してあることを薄暗い机辺で偶然に発見したのはその翌年である。

眠っていた白点が目ざめた。まさに陰翳礼賛である。そこから『仮名遣及び仮名字体沿革史料』（明42・3帝国学士院蔵版）にいたる訓点研究がはじまり、春日政治『西大寺本 金光明最勝王経 の国語学的研究』（昭7・12・5 財団法人斯道文庫蔵版 岩波書店）にひきつがれていく。

そのごの事情は、『国語学』〈増補 国語国文学研究史大成15〉（昭36・2・10 初版、昭53・7・1 増補版、全国大学国語国文学会、編著者佐伯梅友・中田祝夫・林大 三省堂）に学ぶびたい。

露伴の死後に公表された日記によれば、明治四十四年七月三十一日、京大文科大学を出て奈良へ赴任することになった春日政治が旧師の露伴を向島に訪れてもいる。

仮名とはなにか。渡来した漢字を借りてことばを表記する場合、本来の漢字が真名ならこちらは仮名である。〈上代特殊仮名遣〉とは奈良期やそれ以前の漢字表記のうち、同音と思われる音訓を二系列に書き分けてある用法を特殊な仮名遣いと見たもので、江戸期の石塚竜麿が発見、再発見し紹介した橋本進吉は二系列をかりに甲類・乙類と名づけた。

橋本進吉「国語仮名遣研究史上の一発見――石塚龍麿の仮名遣奥山路について――」（大6・11『帝国文学』第23巻第11月号）・「上代の文献に存する特殊の仮名遣と当時の語法」（昭6・9『國語と國文學』第8巻第9号）ほか

すなわちつぎの十四の清音とその濁音七、計二十一音をめぐる仮名の二系列である。

キ・ヒ・ミ・ケ・ヘ・メ・コ・ソ・ト・ノ・モ（『古事記』だけ）・ヨ・ロ・エ

「エ」はア行とヤ行の別、他は母音の音韻のちがいと見なされた。現代とおなじ甲類ア・イ・ウ・エ・オ五母音のほかに乙類イ・エ・オ三母音、計八母音であったとする。

露伴が〈上代特殊仮名遣〉に一言も触れなかったわけを思案していると、幼い疑問が湧いてくる。①甲類と乙類と、どちらが現代日本語の音韻にちかいのだろう。②二系列の母音がなぜ五十音図のア列とウ列とになかったのだろう。③イ列・エ列ではなぜ喉音と唇音に偏したのだろう。④オ列二系列はなぜほとんど各行にしぶとく残ったのだろう。⑤平安初期なぜ百年たらずで乙類が失せたのだろう。論議の余地がありそうに思われた。

松本克己『古代日本語母音論―上代特殊仮名遣の再解釈』〈ひつじ研究叢書（言語編）【第四巻】〉（1995・1・30　ひつじ書房）

は言語一般の母音配置に照らして五母音説を出した経緯を示し、論争から遠ざかった。

森博達（ひろみち）『古代の音韻と日本書紀の成立』（1991・7・1）・『日本書紀の謎を解く　述作者は誰か』（1999・10・25、2000・9・30四版、中公新書）

安田尚道（なおみち）「石塚龍麿と橋本進吉――上代特殊仮名遣の研究史を再検討する――」（『国語学』第54巻2号）・「橋本進吉は何を発見しどう呼んだのか――上代特殊仮名遣の研究史を再検討する――」（平16・3『國語と國文學』第八十一巻第三号）

は述作担当者や研究史から見なおしている。まこと、有為（うゐ）の雪山（ヒムアラヤ）は越えがたい。

カーライル革命史

西洋物には縁遠いような幸田露伴だが、「暴風裏花（りのはな）」の結びでこんなことを書いている。

仏蘭西革命の時にも獰猛（だうまう）なマラーが一女子の為に殺されたことは革命史を読む者の驚嘆するところであります。（大15・10・1『女性』10巻4号）

シャルロット・コルデイCharlotte Cordayという二十五歳の共和論者がノルマンディーの田舎から馬車で三日かけて巴里（パリ）に出てマラーを刺殺した事件で、ジャコバン党のマラーJean Paul Maratは急進的な新聞『人民の友』を発行し国民公会議員に当選してジロンド党を議会から駆逐した猛者（もさ）である。森鷗外にも「女丈夫」（明25）の訳がある。露伴は高橋五郎訳で『カーライル仏蘭西（フランス）革命史』第三巻第四編第一章を読んだようだ。高橋五郎（安政三年1956～昭和一〇年1935）は新訳・旧訳の聖書やカーライルなど翻訳や評論の先達で、訳は版を重ねた。大正六年（1917）ロシア革命、七年にシベリア出兵や米騒動があった。

露伴学人識「カーライル仏国革命史序」「鼇頭（ごうとう）評」（大15・6・5　高橋五郎訳『カーライル仏国革命史上』『カーライル仏国革命史下』、国民文庫刊行会）

これら露伴の評は、大正六年に四冊出そろった国民文庫版を底本（そこほん）としたものであろう。

第一巻（一・二十三）第一巻　国事犯獄バスチル　第一編　路易（ルイ）第十五世の崩殂～

第二巻（四・三十）第一巻第五編　第三族～　第二巻　憲法　第一編　槍祭～

第三巻（七・二十五）第二巻第四編　ワレン～　第三巻　断頭台、ギロチン　第一編～

第四巻（十・二十八）第二編　弑王（しおう）　第三章　王冠を奪ふ〜　第七編　ワンデーミエール

ただし、エブリマン Everyman 文庫でカーライル Thomas Carlyle の原著 THE FRANCH REVOLUTION の構成を見たかぎりでは、全体が三つの PART から成っており、〈第一部〉などと訳してよいところである。ところが第一巻・第二巻・第三巻と訳してある。

第一巻　バスチル　第二巻　憲法　第三巻　ギロチン

訳本の冊数一〜四巻と原文の構成 PART Ⅰ〜Ⅲとが入り組んでしまった。それはさておき、大正六年一月版高橋訳第一巻の冒頭の項目を掲げ、訳者の用意を確かめておこう。

カアライル評伝・仏蘭西革命梗概年表・凡例・本巻目次

凡例に言うとおり、各章の末にある注解・注説は人名地名の綴りに及んで丁寧である。

第一巻　国事犯獄パスチル〈PART Ⅰ THE BASTILLE〉

第一編　路易第十五世の崩殂〈BOOK Ⅰ DEATH OF KOUIS XV〉

第一章　慈愛王—路易〈Chapter Ⅰ Louis the Well-beloved〉

目次の冒頭三行を挙げ〈　〉内に参考として英文を示せば、訳文の字面（じづら）が古風でいかめしい。バスティーユとかバスチーユとか今日言いなれている名にも独自の工夫があったようである。先ほどのマラー Marat はジャン・パウル・マラット——。奇異な印象だがまんざらの誤りでもなかろう。露伴「鼇頭評」（大十五・六・五）もマラットにしてある。

奇。シャルロット・コルデイは是（こ）れ沙漠の花。／マラットの生活も亦（また）敬すべし、其人は兎（と）に角（かく）其生活は何ぞ

聖者の如くなるや。／ロベスピエールなりしや誰なりしや、権利は腕力なりと云へる者ありしを記憶せよ。シャルロットは其教修に従へるのみ。

東洋の治乱興亡に通じた大読書人の言として一行分五字ほどの上欄評が重みを加えたのであろうが、想像上の大海亀の頭にちなんだ鼇頭。大時代な言い方をしたものである。

露伴はカーライルの筆力について、「文情変幻奇詭、螺貝の色の紅光青色黄光緑光等を放つが如く、端倪す可からず。」（第一巻第二編第一章）と驚き、ルイ十六世が国外脱出を決行して捕らえられる第二巻第四編では、「宛として是れ一部の好小説。」（第三章）、「探偵小説、探偵小説。」、「是れ仏蘭西革命史？　是れ支那叛乱小説？是に於て東西人情事態同一不二なるを看る。」（第七章）と述べてはいる。が、次のような批評がある。

カアライルの文、自尊自慢、侮他排他の氣甚だ多きに過ぐ。人の耳目を威嚇する如き調多く、人の心胸に浸潤する如き味少し。（第二巻第一編第一章）

露伴の評には時代の器にかかわるものがあり、革命史ころの政治家・煽動者・民衆は露伴にとって器が小さかったようである。話をプルターク英雄伝に移したい。英雄伝は時代や世界や人物の柄が大きいのか、露伴も「プルターク先生」と敬称つきである。

高橋五郎訳『プルターク英雄伝』一〜四（泰西名著文庫、大三〜四、国民文庫刊行会）

露伴が読んだのはこの版であろう。文章を出すまでに十年かかってもおかしくはない。

「プルターク英雄伝と史記」（大14・5『週刊朝日』第二週号、昭5・1　国民文庫刊行会改版『世界名作大観』中、高橋五郎訳・幸田露伴校並鼇頭評「プルターク英雄伝」第一巻に再録、随筆『木屑』に収録）

この文章が機縁となって高橋訳『プルターク英雄伝』・『カーライル仏国革命史』の双方に、露伴の校閲と序と鼇頭評が加えられることになったものと見える。昭和五年の改版には「世界名作大観の内」「幸田露伴校並鼇頭評」と銘打ってある。

第一巻（昭5・1・25）・第二巻（2・20）・第三巻（3・30）・第四巻（4・15）

昭和五年版は、第一巻の巻頭に「地図三葉」「凡例」「序」「概言」「原著者プルターク略伝」「プルターク英雄伝と史記」（露伴）がある。なぜ第四巻にのみ十日後の再版があるのかは不明である。露伴「概言」が第一巻に載ったとされる版（大14・7・25）も未見。書名も欧米なら〈Bioi paralleoloi〉か〈Bioi〉というから、〈プルタルコス Ploutarchos 対比列伝〉とありたいところだが、鶴見祐輔が英訳から重訳して（昭9　改造社）「英雄伝」を定着させたらしい（松本仁助（にすけ）・岡道男・中務哲郎（なかつかさてつお）編『ギリシア文学を学ぶ人のために』1991・5・10　世界思想社）。そもそも高橋訳の原本が今のところ見当つかないのである。

露伴の評は広く薄く全巻に及んでいるが、第一巻に厚く、アレキサンデル大王／ジュウリアス、シーザル／デメトリアス／マーク、アントニー／ブルウタス／ケーヤス、マーシアス、コリオラナス／アラタス／ピルラス／ポンペイ／ペリクレス――にくわしい。

ところで岩波文庫『プルターク英雄伝』（河野与一訳）十二冊は、一（1952・4・5　第1刷）から十二（1956・9・5　第1刷）まで六年がかりの訳業とある。拾い読みでのんびり構えていた。が、高橋訳と付き合わせる段になってあわてた。順序が違うのだ。

高橋五郎訳は全四巻より成り、第一巻は、対比するギリシアとローマの英雄として、

アレキサンデル大王（Alexandros the Great）伝［アレクサンドロス Alexandros）
ジウリアス、シーザル（Julius Caesar）伝［カエサル Caesar］

から始まり、（ ）内が原綴りである。以下、［ ］内に河野訳を引き列記してみよう。

デメトリアス（Demetrios）伝［デーメートリオス］・マーク、アントニー（Mark Antony-or Marcus Antonius）伝［アントーニウス Antonius］・デメトリアスとアントニーとの比較・デオン（Dion）伝［ディーオン］・ブルウタス（Brutus）伝［ブルートゥス］・デオンとブルウタスを比較す・アルシビアデス（Alaicibiades）伝（アルシバイアセーズとも発音す）怪哲テモン伝参出（アントニー伝参看）［アルキビアデース］・ケーヤス、マーシアス、コリオラナス（Caius Marcius Coriolanus）伝［ガーユス マルキウス コリオラーヌス］・アルシビアデスとコリオラナス（マーシアス）とを比較す・テミストクレス（Themistocles）伝［テミストクレース］

では河野訳の始めにあったテーセウスとロミュラス――、ギリシアとローマそれぞれの祖は高橋訳ではどこへ行ったのか。第四巻の筆頭にテセウス（Theseus）伝・ロミュラス（Romulus）伝として置かれ、結びのガルバ（Galba）伝［ガルバ］とオソ（Otho）伝［オトー］は同じ。河野訳十二の〔附録〕によって本文（テキスト）の沿革から学びなおすほかなかろう。

欧米にはギリシアとデモクラシーを讃美する周期があったようである。高橋五郎と露伴との折衝も不明、史伝および大正～昭和の世相を露伴はどう見ていたのか。

日中戦争のころ露伴の机辺に『資本論』の部厚な英訳本The Capitalがあったという証言がある。（斎藤越郎

『増補　蝸牛庵覚え書―露伴翁談叢抄』1994・11・10　けやき出版）

雪紛々

下北半島の沖合で大きく左に旋回した氷川丸が太平洋から津軽海峡へはいったとき、夏の陽が日本海へ沈みかけ、夕陽を浴びた恐山の岩肌が視界に迫ってきた。たしか昭和二十三年、ナホトカへ引揚げ者を迎えに行く空船が臨時の片道便として東京芝浦から函館まで航行したとき三日目の甲板で見た光景である。たぶん旧会津藩の移民たちも明治二年（1889）九月に品川から十二、三日がかりで蝦夷地の小樽へ向かったとき、アメリカ船ヤンシー号の甲板から同じような光景に見入ったことであろう。恐山の山麓に会津の侍たちが松平家再興を賭けて、斗南藩三万石は名ばかり、荒れ地で悪戦苦闘しているのを知っていたはずである。（葛西富夫『新訂会津・斗南藩史』平4・12・30　東洋書院）

ヤンシー号の移民第一陣の百世帯は、そのまま海峡を抜けて日本海を北上したあと、積丹半島ぞいに神威岬を大きく右にかわして小樽へ着いた。積丹東北部の余市が永住の地になろうとは思いもしなかったろうし、幸田成行の船旅に先立つこと十五年前の話である。

予が年いと若かりし時、函館より小樽に至る舟路の途上、あれこそ積丹の山よとて人の指し教へ呉れしまゝ、沖合より打眺めしに、山の姿もたゞならず鬼々しくて、（略）折からの夕日の光に映えたるさま、何と無く都遠き風情ありて物恐ろしく覚えしが、夢の中にて見し山は即ちむかし現にてまことに見たりし山なりしなり。（「雪紛々引」）

明治十七年七月、数え十八歳。札幌県余市のにしん漁場へ電信分局の逓信省十等技手の身で赴任し眺めた印象である。のち十四回で中絶した小説「雪紛々」の心象でもあった。

三年後の八月に成行は職場を放棄した。海峡を渡ってから歩き続け露伴と号するにいたった経緯、出世作『露団々』（明22・1～8『都の花』）など、いっさい省略しよう。題名からして『露団々』と対をなす「雪紛々」（『読売新聞』明22・11・25～11・25）は、しかし生い立ちからして不幸だった。十二年後（明34・1）に堀内新泉が第六十八回まで書きついで春陽堂から刊行されはした。が、序として加えた露伴の「引」に注意したい。

要するに、新聞記事が政府の忌諱にふれた「解停後の新聞紙の面目を一新」する口実で社が作品の差し替えを求めてきたのだ。「蕪猥粗雑の悪文字」、「人の看ることを厭ひ」などと露伴は顧みるが、その実、雪の積丹岳はすでに『露団々』で作中の叙事詩の主題とされている。「雪紛々」の創作をうながし、雪中に事切れる美人像は最終章の腹案として深層心理ともなった。ただし、続稿が書けたことで弟子の新泉は一息つけたはずである。

露伴が夢に見た積丹の険しさとはなにか。山容に託された人間たちの悲劇であろうか。

余市町の町道第一号に指定された山田入舟線は、かつて会津の妻女たちが鰊場に粟餅や草団子を売るための道路として、山田村に入植した会津人たちが湿地に石を投入して造った苦難の道しるべである。（葛西富夫『新訂会津・斗南藩史』）

去った者もある。会津武士はやがて漁場の衆からリンゴ侍と呼ばれるようになった。

明治十二年（一八七九）に結実した余市の十九号（緋の衣）と四十九号（国光）のわずか数個のリンゴは、その後の余市の進展を大きく変えていった。（同）

開拓使から配布されて植えっぱなしにしておいた苗が実をつけたのだ。青森県に二年おくれはしたが、にしん漁にかわる果実の里余市がそだち、鶴竹政孝を六年間食いつながせた大日本果汁の創業に及ぶ。昭和十五年（一九四〇）のニッカウヰスキー第一号の熟成である。

成行の草稿「幽玄洞雑筆」その他は二瓶愛蔵『若き日の露伴』（昭52・10・25　明善堂書店）の考証にゆずる。会津人の艱難は艱難。積丹には先住民族が暮らしていたのだ。

「雪紛々」の主題はアイヌの「一悲劇」と見てよく、露伴が「寛文の蝦夷乱」（1669）に「想像」を馳せていたことは当人が「引」で述べた次の数節からも読みとれよう。

沙具沙允の（中略）「せたかむい」といへる巖の上にて凄じく雄叫びしたる後自ら死するくだり／伊良武が夫を尋ねて積丹の荒山にさまよへる後其死を聞きて恨み悲みつ生命絶ゆるくだり／恩菱と沙具沙允と涙をふるつて袂を分かつくだり

伊良武は恩菱の妹、沙具沙允の妻とされ、小説は初めから悲涼の氣を帯びていた。

語らうか蝦夷のむかし、語らば恨に声も立ぬなるべし、書うか其恨み、書ば悲みに筆も凍るべし。いで書き流さん墨の痕、濃かれ薄かれ我筆の凍るまで。（第一回）

読者の前に展開したのは、帝都に遠い蝦夷地、洞爺の西に広がる晩秋の山渓である。

遠く見ゆる後方羊蹄岳昆布岳、近く見ゆるは静雁峠ホロナイ峠、西南に聳え連なるチフトラシ岳、ヲタニコロ山、其背面に続くブナノキタイ、ワラビタイ等黒松内の山々、或はウス岳オロフシ山、低きも高きもそれ〳〵に春夏の模様とは変りて淋しさを添ふる眺望。（略）此処は那処ぞ、蝦夷が島根と名に呼ばれし土地の

中の下場所なる静雁村の山奥にて、朱魔珊の川の畔なり。（第二回）

官員時代の成行は、稲穂峠を越えて積丹西南部の岩内まで行ったことがあるかどうか。カリブト（現ニセコ）・倶知安の地は踏んでいないだろう。有島武郎『カインの末裔』（大6・7『新小説』）終章の遠景となった昆布嶽などは地図か文書で混保岳として確かめたものであろう。『山田秀三著作集』（全四巻）、とくに『アイヌ地名の研究　第二巻』（昭58・3・20　草風館）第二部「四　倶知安・余市間の二つの稲穂峠」によれば、幕末に松浦武四郎がアイヌを説得しいしい岩内堀株川からもう一つのエナヌ（木幣）峠をたどって尻別川の上流の鮭鱒の漁場＝倶知安の秘境に入ったこと自体、容易ではなかった。

成行は、しかし見るべきもの、いや、見てはいけないものまで通信機構の底辺から見たはずである。若い官員はモテた。荒れたのだろうか。例えば秋葉実［翻刻・編］『松浦武四郎選集』四「巳手控　一～七（安政四年〈1857〉）」（2004・6・25　北海道出版企画センター）。その「〔安政四年手控〕巳第三番」〔アイヌ語親族呼称〕を開くだけでいい。

〔辰シャコタン人別　八四人〕〔ビクニ人別　一六人〕〔フルビラ人別　二〇七人〕〔下ヨイチ人別（巳四手控に続く）三一三人〕手控　巳第四番〔下ヨイチ人別（巳三手控より続く）三一三人〕〔上ヨイチ人別　一八三人〕〔ヲシヨロ人別　一三〇人〕〔タカシマ人別　七〇人〕〔ヲタルナイ人別　九七人〕

上欄の注をたよりに他の松浦文書とも翻刻でたどっていると、疑念が湧く一方である。幕末蝦夷地ウタリの人口と姓名とはどこへ消えたのか。明治三年五月、松浦武四郎は数え年五十三歳で従五位開拓大主典という顕栄を捨てて素浪人になっている。あまねく踏破した蝦夷地を二度と踏むことなく、明治二十一年（一八八八）に七十

一歳で没した（花崎皋平）。

その二年前に職場を棄てた成行だが、聴く人でもあった。電信音の二進法、風浪と鷗と、奥羽なまりの浜ことばと会津弁と。そしてアイヌ語の音韻―例えばｐｔｋ音が江戸っ子の心耳に達したことを思いたい。「雪紛々」はそのような立場で語られていたのである。

脚絆　腰刀　蓆嚢　賦役　日本人　酋長　呑空　村塚　馬鹿役人　似非役人（第三回）

呑空は円空がモデルか。恩菱と沙具沙允に文字を教えて松前藩に忌避され東海岸へ去った。村塚は馬鹿役人・似非役人。「畜生役人・豺狼役人」・場所請負人の総代であろう。

のちに露伴は「みだりに粗大なる想像を馳せ」たことを恥じた。蝦夷地に限ったことではない。次兄郡司成忠らの報効義会が千島アイヌの故地に移住した明治二十四年ころから作風は重厚になり、考証に沈潜した。父成延も妹延子も千島の土を踏んだが、日中戦争の海外膨張期に露伴は『逓信協会雑誌』記者などの訪問に老耄を装ったふしがある。しかし、『音幻論』（昭19・8～昭20・12　口述、昭22・5・30　洗心書林）を通読すれば、早くから東北方言・アイヌ語・朝鮮語の音韻に注意していたことは疑いない。

大正十一年（1922）七月十八日、有島は農場解放を宣言。九月十三日、本郷区森川町の金田一京助宅へ渋沢敬三が『アイヌ神謡集』のタイプ原稿をとどけ、十九日その校正を果たして知里幸恵が死去。十九歳。翌十二年八月十日炉辺叢書（郷土研究社）の一冊として刊行し九月一日大震災。その年投稿をはじめた金子みすゞの童謡とともに列島弧に生まれた至純の詩篇とされ（矢崎節夫）、アイヌ言語学の知里真志保博士は令弟である。

瑠璃光

戸倉駅から上山田へ行く乗合自動車の中で車掌たち若い男女が話をしている。あれからどうしたね。ナオヤがピストルを持ってあばれこんだんだ――というやりとりに、それまでぼんやりと乗り合わせていた志賀直哉が急に聞き耳をたてると、菊池寛の小説「真珠夫人」の話で、「その瑠璃子が後に真珠夫人となってあまたの男女を弄ぶのだ」などといった車掌の説明がつづく。

これは直哉の「豊年虫」（昭4・1・1『週刊朝日』第15巻第1号）にある一場面で、若者たちがかわすナオヤの話題や菊池寛崇拝に作者自身微妙な心持ちになっている。

「真珠夫人」は大正九年に『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』とに掲載され（6・9～12・22）、この作で菊池寛は通俗作家の道を踏み出した。真珠という題名も瑠璃子という名前も、当時きらきらしかったにちがいない。唐沢男爵の令嬢から父をおとしいれた船成金荘田の後妻にされた瑠璃子は、処女の純潔を守りぬいて荘田への復讐をはたすが、彼女を慕う青年に刺され、継子の美奈子をむかしの恋人に託して死ぬ。妖婦と思われた真珠夫人の心底にはナオヤ＝杉野直也への瑠璃子の純愛が秘められていたのだという。

瑠璃は七宝のひとつで紺瑠璃ともいう。青い色の宝石で、名称自体、ラ行音が語頭にあって、いかにも異国から渡来したことを思わせる響きである。

歯朶くらし小瑠璃のこゑのまろびくる　秋桜子

浄瑠璃、と称えるだけで清浄な透明な世界が思われる。室町末期の音曲語り物の中の人名が「浄瑠璃姫」の名

で義経説話のひとつに加えられたとき、東方の浄瑠璃浄土の連想から、民衆はどれほど高貴な印象をおぼえとったことか。この新しい音曲形式がそれ以後ながく浄瑠璃とよばれるようになったことを、ゆかしく思うのである。

梵語ではヴァイドーリア（Vaidūrya）という。あらかわ・そおべえ編第二版『外来語辞典』（1977・1・30二版　角川書店）には、吠瑠璃・吠努璃・毘瑠璃といった仏典の表記を示しており、感じがすでに異国調である。一足飛びに古代史におもむくのが賢明なようである。

丸山次雄の遺著として知友たちによってまとめられた『ガラス古代史ノート』（昭48・6・10）が手元にある。雄山閣の限定四〇〇部の、その第二章「ガラスの言語学」を何よりもありがたく思うのは、透徹にして明快な行文と堅実な補注にじかに触れることができる点とにある。

「瑠璃も玻璃も照らせばわかる」。照らせば光る、という諺もあって、すぐれたものは照らせば光る、照らしようで違いがわかるという。古代文献ではガラスを指すのにもっぱらルリが用いられ、ハリはかなり後代になってから現れてくる――と、著者は黒川真頼の「日本瑠璃七宝説」や「本邦硝子製造の説」を引いたうえで、中尾万三・松本文三郎・石田茂作・原田淑人・後藤守一ら先人の考証を紹介している。

著者は昭和四十六年一月、四十六歳で世を去られたという。

「ルリ」考(1)では、とくに仏典漢籍をひろく渉猟した松本文三郎の基本的業績として「瑠璃考」を『芸文』第一回巻五号などから紹介しており、この雑誌自体、当方は通読したいと心がけて「瑠璃考」のあたりしか読んでいない雑誌である。

西域に分布するウィグル語・トルコ語・タタール語ではガラスをボロール（bolor）あるいはベルール

(belur) と呼ぶ。松本説はこれを Vaidūrya（ヒンドスタニー Veluriyam）を漢音訳した吠瑠璃・毘瑠璃・吠瑠璃耶からの借用だとし、ルリは緑柱石をさしているという。中国の三国時代以降は、真正の緑柱石は用いられず仮ルリ、すなわちガラスかラピス＝ラズリの類をルリと誤称した、というのが松本説の概要であった。

著者の丸山説はつづく「ルリ」考(2)において展開され、南インドの諸港を経由して西域のルリが中国に達したと考え、むしろラピス＝ラズリこそルリであったと考える。

丸山説はこのあと、ラピス＝ラズリの流伝とガラスにうつり、ヨーロッパでガラスを示すのに大きく三つの言語集団があるという。ロマン語群のたとえばラテン語 Vitrum または Vidtrum が一系統、ゲルマン語群のたとえば中世英語 Glas あるいは Gles が一系統、スラブ語群のたとえばロシア語 Steklo または Grekro が一系統であり、ほかにギリシア語ではガラスを Hayalos と称する。このヒアロスが「ハリ」の源だとする松本説に丸山説は賛成しつつも、中国に伝えられた経路を北方のシルクロードまたは南海に求める。

『ガラス古代史ノート』はこのあとナイルからメソポタミヤ、ローマへと及ぶ。当面この辺で、語学とガラス史に生涯を傾けたこの人の遺著に別れなければならないだろう。

ルリといいハリという。ヴァイドーリァ転じてビードロ Vidro。わずか Vaiduria の一語ながら、言語というものについてあれを思い、これを思うのである。

たとえばある言語の固有性、ある文章の文体とはなんであろうか。外来語研究の荒川惣兵衛によれば、たいていの日本語の基本語彙が中国語からの転用だという。日本の古代語彙をあらかた中国語に帰属させることに情熱

を傾けたかと疑われるほどである。

他方ルイ＝アンドリュー＝ミラーは、アルタイ語とくにツングース語との類縁を証明しようとして「グリムの法則」や「ベルネルの法則」を駆使する。『日本語とアルタイ諸語　日本語の系統を探る』（昭57・6・30　大修館書店）や村山七郎『日本語の起源』（昭40・4・25　筑摩書房）で見るかぎり、訳者の西田龍雄や村山七郎は慎重に態度を留保している気配だが、著者は南方渡来説も言語混淆説も斥けてレナード＝ブルームフィールドの『言語』を聖典視したように思われる。

荒川説同様、敬意は表するものの、どこか付いて行けない。たとえば、橋本萬太郎の『現代博言学　言語研究の最前線』（1981・2・1　大修館書店）を見ようか。ウィリアム＝ジョーンズ卿が長年の経験を通してヨーロッパの古典語をサンスクリットやペルシアの古典語と比較するようになり、ある共通の来源語を想定し発表した（一七八六）。そのことに触れ、こんなことをささやきかけるのである。

おどろくべき洞察ではあったが、しかし、それから間もなく、生物学者もおなじような、史的発展のかんがえを、生物についてもつようになってくるところをみると、一九世紀の学問全体を特徴づけるところの、知的探究のバイヤス（偏向）ということは、一八世紀末からの思潮となっていたことをおもわせる。

物事すべて系統論や発展史で片づくものだろうか。人間生きていくうえで借用し誤用し混用する、浄瑠璃姫がいて唐沢瑠璃子がいて直也がいて直哉がいる。よいではないか。

ここに、若いころ通信技手として電信音と肉声、江戸弁と浜ことばを聞き分け、音声と文字とを使い分けた人がいる。最晩年は言語現象を仏教世界の曼荼羅（まんだら）のように反芻（はんすう）し天井板を眺めて寝たきりだった。渤海（ぼっかい）国のことば、

というからツングース語に没頭していた時期が、わずかに『座談会明治文学史』（昭36・6・9　岩波書店）の勝本清一郎の証言で知られている。

その人の、瑠璃についての口述筆記が『音幻論』（昭22・5・30）の「音の各論」（もと昭20・2〜9　『文芸』）中に見えるので引いてみよう。

一体外国の言語が他の国へ移し植ゑられる時には多少の変化を免れないのが常で、例えば印度の詞（ことば）が支那に入るとプラシニア Prajna といふ語が般若（ハンニャ）となり、ニルヴァーナ Nivvana といふのが涅槃（ネハン）となる如く随分驚くべき変化を生じてしまふ。

そのあと瑠璃の説にうつる。さきの松本文三郎「瑠璃考」（『芸文』）にいう三国時代以降のガラス代用説をうけたものかと思われるが、つぎのようにつづけている。

いろはガルタの、瑠璃も玻璃も照らせば光る、の瑠璃は昔高山の頂に棲んで日に龍を何十百と食ってゐた猛鳥が死して、その心臓が残りとゞまつたものが瑠璃となつたといふ印度の伝説があり、

というあたりは、この人自身の読書と研鑽から得たものであろう。

然るに後には吠も省かれてルリとなつた。薬師如来の瑠璃光といふのその義から出ている。（略）支那で三国の時の曹操が瑠璃の筆管の筆を用ゐたといふが、それは人造の瑠璃に定つて居り、即ち（すなわち）今謂（い）うガラスである。（幸田露伴）

学　歴

内藤湖南は秋田師範学校卒の新聞人、幸田露伴は電信修技学校卒の小説家。二人を教授陣に迎えたのは京都帝国大学の文科大学長狩野亨吉（かのうこうきち）である。同年（明41）職を捨てた変物だが人を見る目があった。この科学者をてこにして明治の学歴を見とどけようと考えた。

鈴木正『増補　狩野亨吉の思想』（2002・5・10　平凡社ライブラリー）

青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』（昭49・11・30　明治書院、昭62・9・10　中公文庫）

両著の持ち味や亨吉が発掘した安藤昌益のことはおあずけにして、もう一冊開いた。

荒正人（あらまさひと）著・小田切秀雄監修『増補改訂　漱石研究年表』（昭59・6・30　集英社）

亨吉の友人夏目漱石の学歴や交友関係、とりわけ当時の学校制度にくわしいから、三冊引き合わせて通読すればおもしろかろうと思ったのである。事実おもしろかった。そのひとつに文明開化期の電信事業がある。例えば「明治十一年戊寅（ぼいん）（一八七八）十二歳」。

★〔三月二十五日（月）、築地の電信分局を閉鎖し、京橋木挽町（こびきちょう）十丁目十一番地（現・中央区銀座六丁目十五番）に、電信中央局を設けて、全国電信事務の中心部とする。万国電信公法により外国通信を扱う。〕

九年後の「明治二十年丁亥（ていがい）（一八八七）二十一歳」。「★六月二十三日（木）、次兄直則（ニ）、肺結核で死去する。満二十八歳八ヶ月。」とあり、下欄の注に露伴の出た学校の名が見える。

電信中央局（日本橋電信分局。八等技手下。俸給月額二十円）に勤めていた。電信修技学校（東京府豊多摩

郡中野町字囲（かこい）、現・東京都中野区中野四丁目八番一号）卒業後

とあるのはのちの陸軍中野学校（昭13〜20）、秘密諜報員養成所が置かれた地である。

まったくの偶然ながら、その二か月あとに成行十等技手が北海道余市分局の職場を捨てて帰京した。塩原金之助（漱石）は成行—露伴と同じ慶応三年（1867）生まれだから、金之助にとって七歳うえのこの次兄は電信畑で幸田技手の大先輩にあたり、勤務先を下欄の注で追うと、東京・秋田・岡山・長崎・岡山・中央（東京）。成行とは大違いである。

電信事業草分けの時代にそれが順当で、成行、学校で教官の覚えがよほどわるかったようだ。ただし露伴はこのあと文名を一気にかちとる。京大の椅子も一年で捨てている。

ひきかえて、金之助は律義。かつ低徊する。後年認めたように、拙である。明治二十六年（1893）七月、帝国大学文科大学の英文学科第二回生として卒業。大学院の学費かせぎにえらんだ先が豪勢だった。学習院・高等師範学校・第一高等学校・東京専門学校（現、早稲田大学）——、棒に振って都落ち。そのくせ、一回生の立花政樹が研究から離脱したあとのわが英学界の期待はつぎのトップ金之助に集まったはずである（大村喜吉（きよし））。当人も「洋文学の隊長」になる気で俸給分、律儀に勤めて留学費をためにかかった。

が、二十七八年の日清戦役が、拙にとぼしいと見えた正岡子規の健康までも翻弄した。

『明治以降教育制度発達史　第四巻』（昭十三・十一・十五　文部省内／教育史編纂会編修／右代表者　関口龍吉、発行所　龍吟社、頒布所　財団法人社会教育会／龍吟社）

右の一巻を通覧するだけでいい。次のような項目が目白押しである。

「文科大学学科課程」（明19・7・21官報）、「帝国大学ヲ東京帝国大学ト改称ス」（明30・6・22勅令第二百八号）、「京都帝国大学」新設（明30・6・22勅令第二百九号第一条）、「京都帝国大学ノ分科大学ハ」「法科大学医科大学文科大学及理工科大学トス」（第二条）／「学位令」（明31・12・10勅令第三百四十四号）、「学位ハ法学博士、医学博士、薬学博士、工学博士、文学博士、理学博士、農学博士、林学博士及獣医学博士ノ九種トス」（第一条）、「明治二十年勅令第十三号学位令ニ依リ授与シタル学位ハ本令ノ学位ト同一ノモノトス」（第四条）／「大学予備教育」（明29・6・11　文部省訓令第四号）、「第一高等学校・第二高等学校・第四高等学校・第五高等学校」

「日清戦役後中学校は非常の勢を以て各地に増設され大学予科に入学を志望する者も次第に多くなつたので」（四〇〇ページ）と同書の説明にある。その勢いを追ってみよう。

「第三高等学校ニ大学予科ヲ設置ス」（明30・4・17　文部省令第三号）、「第六高等学校大学予科新設」（明33・4・19　文部省令第七号）、「文部省直轄諸学校官制中の改正」、「第七高等学校造士館（鹿児島）設置」（明34・4・1　勅令第二十四号）、「高等学校大学予科入学試験規程」（明35・4・25　文部省告示第八十二号）

ほか「師範教育其他教員養成制度」「海外留学生」に戦役前の緊縮財政と建艦費献納の俸給一割天引きがひびく一方、戦後の賠償金と台湾景気が漱石に英国留学を命じている。

条約改正を目ざして列島弧全体が普請中だったのだ。初代文部大臣の森有礼（ありのり）は刺殺されたが啓蒙主義と国家主義の路線は継承され、実務をこなしたのは旧藩の子弟層である。

上沼八郎『伊沢修二』（昭37・10・25　昭44・5・10　日本歴史学会、吉川弘文館）
新渡戸稲造『幼き日の思い出／人生読本〔抄〕』（1997・5・25　日本図書センター）
札幌市教育委員会文化資料室『さっぽろ文庫34　新渡戸稲造』（昭60・9・18）

この世代が幕末維新期に国とおのれの進路を賭けて上京し留学した事例は両人に限らない。仕事も人脈も多様で、伊沢修二は当時の中国人留学生に娘をとつがせている。中村弥六、メーソン、坪井玄道、グラハム＝ベル、大矢透――、ふしぎな人脈である。劇作家の飯沢匡によれば、伯父は無類の癇癪持ちですぐ暴力に出たそうな（人物叢書附録第98号）。

建築　師範教育　音楽教育　体操教育　盲唖教育　殖民地教育　教科書　音韻研究

新渡戸稲造の原点は祖父伝以来の三本木開拓にあるという。大学予備門・札幌農学校、入信して東京大学からアメリカ・ドイツへ留学し、アメリカ婦人メリーと結婚した。

農政学　社会教育　殖民地政策　甜菜甘蔗製糖　高等教育　女子教育　国際連盟

お仕着せの学術技芸ではある。士魂と信仰との葛藤は両人それぞれにあったようだ。

両人は教育と拓殖で交錯する。その地は琉球弧のさらに西南、台湾であり。第四代総督児玉源太郎（明三十一～）と民政局長後藤新平の時期にあたる。功罪は次の研究から学びたい。

林茂生著、古谷昇・陳燕南訳『日本統治下の台湾の学校教育　開発と文化問題の歴史分析』（2004・1・20　拓殖大学　海外事情研究所華僑研究センター）

著者は現地から東京帝大までの教育を経験し、公式資料により合衆国で研究したとある。

ここで、当時の文教に縁ある群像の旧藩・学歴・職務を思いつくままに挙げようか。

18 24秋月胤永（会津藩―五高）　35福沢諭吉（中津藩―緒方塾―海外出張―慶應義塾）　38大隈重信（佐賀藩―早稲田―首相）　43新島襄（安中藩―脱藩留学―同志社）　45山川浩（会津藩―海外出張―高師・女高師校長）　47森有礼（薩摩藩―留学―初代文相）　50清浦奎吾（肥後―咸宜園―埼玉師範―首相）　大矢透（越後―新潟師範―臨時国語調査会）　51伊沢修二（高遠藩―大学南校―留学―音楽取調所―体操伝習所―高師校長）　那珂通世（南部藩―高師）　54高橋是清（仙台藩―留学―奴隷―大学南校―首相）　山川健次郎（会津藩―留学―東大・九大・京大総長）　58成瀬仁蔵（周防国―済生学舎―留学―日本女子大校長）　59坪内逍遥（尾張藩―東大―早稲田）　60嘉納治五郎（摂津―東大―一高・高師校長）　61内村鑑三（高崎藩―札幌農学校―一高）　62新渡戸稲造（南部藩―札幌農学校―東大―留学―京大―一高・東京女子大学長―国際連盟事務局次長）　森鷗外（津和野藩―東大―留学―臨時国語調査会長）　63巌本善治（但馬―学農社農学校―女学雑誌―明治女学校教頭）　64二葉亭四迷（尾張藩―東京外語退学―同校）　古在由直（京都―駒場農学校―留学―東大総長）　津田梅子（江戸―留学―津田塾）　65狩野亨吉（久保田藩―大学院―一高・京大文科大学長）　内藤湖南（南部藩―秋田師範―京大）　白鳥庫吉（上総―大学院―東大）

そのあとが露伴・漱石である。正岡子規・南方熊楠・尾崎紅葉・宮武外骨・斎藤緑雨、翌明治元年（1868）が山田美妙・北村透谷・清水紫琴――。お仕着せなど似合いそうになく、古在由直が足尾銅山の鉱害を調査し報告を敢行している（明25）。同年この不屈で周到な農化学者と巌本夫妻の媒酌で再婚した作家、清水紫琴の生涯を思うことがある。

血洗島

渋沢栄一は天保十一年（1840）二月十三日、武蔵国榛沢郡血洗島村（深谷市）の豪農商家に生まれ、昭和六年（1931）十一月十一日に没した。天保、弘化、嘉永、安政、万延、文久、元治、慶応、明治、大正、昭和、十一代にわたる数え年九十二歳の生涯であった。

働きづめの人であったが、幸田露伴の伝記は全三六九ページのうち三〇〇ページ以上を三十三歳までの初期三分の一に費やし、壮年期の実業や社会公共事業については五〇ページ弱、要点を押さえただけである。還暦以後の三十年余は八ページに過ぎない。

幸田露伴『澀澤榮一傳』（昭14・5・13　非売品、幸田成行　東京市滝野川区西ヶ原千三十六番地　財団法人澁澤青淵翁記念会　代表者　理事長　男爵　郷誠之助）

翌六月十日、岩波書店から普及版も出ているが、いささか謎をふくむ伝記である。曰く、

明治六年五月を以て官を退き、同六月を以て第一国立銀行総監役となり以後の長き歳月の間、澁澤栄一は復び官に就かず職を転ぜず、（略）故に栄一の真生涯はむしろ六年六月を以て始まったと云っても宜いのである。（二九三ページ）

ところが、官から民に転じた顛末にそのあと二〇ページほどを費やし、次のようにいう。

故に栄一伝は仮に此処で終っても宜い位で、此後は澁澤栄一事功記として、別に其の関与した事業の一箇一箇に就き紀事本末体の一部の書を編成した方が明瞭になるほど、事は多端で且長年月に跨ってゐるのである。

（三一四ページ）

結局、たったの六〇ページ弱。「真生涯」が全体の六分の一とは矛盾した扱いである。それをそうと感じさせないところが露伴の筆力であろうが、謎は謎であろう。

岩波書店に復帰した小林勇らの肝煎りで、遺族に口説き落とされた形の露伴は、昭和九年ごろから催促なしの執筆にかかったという（塩谷賛『幸田露伴　下』）。伝記資料は財団から提供されたが、筆が渋ったようだ。経済学者による偉人伝が先行してはいた。

土屋喬雄『渋沢栄一伝』〈偉人全集　第十四巻〉（昭6・11・20　改造社）

おじけづいたわけではない。この改造社版の偉人全集には『ナポレオン伝』（菊池寛）など外人が十一人、『勝海舟伝』（徳富蘇峰）など日本人が十二人、最終の第二四巻『別冊偉人論及偉人研究』（昭10・1・1　改造社）には露伴も執筆している。全集が企画された当初から、露伴は魏の宰相鍾繇や南宋最後の宰相文天祥などの人傑に思いをめぐらしていたふしがあり、筆の渋りは〈偉人〉の質にかかわる問題にあったろう。

そのためか、露伴の栄一伝は章段ごとに一行あけているだけで見出しがなく、要領がつけにくい。さしあたり土屋著によって澁澤栄一の経歴の概略なりと見とどけよう。

【前篇】一　時勢　二　生家と幼年時代の教育　三　少年時代―家業の手伝　四　少年時代―父の訓戒と迷信打破　五　代官に対する反抗　六　志士との交遊と江戸遊学　七　横浜焼撃計画　八　父への訣別と旗挙の中止　九　京都へ放浪す　十　一橋家出仕　十一　出仕当初の生活と最初の重任　十二　関東人選御用　十三　水戸浪士討伐　十四　兵備建言と農兵募集　十五　殖産興業と藩札の発行　十六　長州征伐及び慶喜

の将軍職相続　十七　幕臣となる　十八　仏国行き　十九　パリーへ着く迄　二十　パリー着後　二十一　各国巡回と留学　二十二　帰国　二十三　静岡へ　二十四　静岡商法会所を起す　二十五　大隈の説得と大蔵省仕官　二十六　在官中の事業　二十七　実業への志望　二十八　父の永眠と退官

【後篇】一　実業界への第一歩――第一国立銀行――

後篇も膨張景気―収縮不況、好景気―恐慌、などの波で十七に分け、多彩である。

露伴は土屋著でいえば「前篇」十三までに約一〇〇ページ、十四～二十四に約一〇〇ページ、二十五～二十八に約一〇〇ページ、「後篇」に約六〇ページ。結果として維新匆々の民部・大蔵の三年半に露伴は紙数を費やし、それがもたらした「後篇」を刈り込んでいる。産業革命とその後始末。膨張する一方だった「時代の人」の「真生涯」を、である。

今日『渋沢栄一伝記資料』全六十八巻（昭三十～四十、竜門会）を見れば、第五十八『伝記資料索引』の「事業別年譜目次」には約一、四〇〇余の会社団体等が掲げられている。しばらく韮崎一三郎・金子吉衛（きちえい）『埼玉の先人　渋沢栄一』（昭58・12・15　さきたま出版会）によって、「栄一が関係した会社、団体などの概目」約五〇〇を、栄一の還暦満六十歳の明治三十三年（1900）で前後にわけて斜線／で示せば次のような数が確かめられる。

【実業・経済】　銀行25／14、銀行団体4／、手形交換所2／1、興信所1／、保険3／10、その他の金融機関／1、海運4／1、陸運27／13、航空／2、通信1／1、綿業、4／2、蚕糸・絹機業3／3、製麻・毛織・製帽5／3、製紙3／3、製革2／1、製糖3／4、麦酒（ビール）醸造2／1、窯業5／2、鉄鋼・精錬1／7、船渠（せんきょ）・造船2／5、汽車製造・自動車製造2／、化学工業3／9、瓦斯（ガス）3／5、電気3／3、土木・築

港・土地会社・その他6／5、取引所8／、倉庫1／2、ホテル3／、貿易9／2、諸商工業11／11、鉱業6／4、農・牧・林・水産業8／9、対外事業3／26、経済団体および民間諸会5／10、政府諸会1／4、博覧会3／4

【社会公共事業】社会福祉施設6／12、保健団体および医療施設3／17、災害救護団体／6、労資協調／3、融和事業／9、国際団体および親善事業1／14、日米親善事業／8、国際記念事業／2、外賓接待1／6、国際災害救助1／2、儒教／3、神社1／3、寺院および仏教団体／9、キリスト教団体／4、修養団体1／7、実業教育5／6、女子教育2／、一般教育関係3／11、学術およびその他の文化事業1／5、演芸および美術／3、編纂・刊行1／5、政治・行政7／7、軍事関係／6、各種団体1／6

斜線の前は官員の三年半をふくむ「実業・経済」の銀行・運輸・紡績が多く、後半は重工業・化学工業・国際事業・財界交渉、それと「社会公共事業」が断然多い。いわば、壮年の重工業化学工業と晩年の内外社会の協調。そこから露伴は身を遠ざけた具合である。

文人の気まぐれ、ともいえない。当時広く読まれた専門家の通史に照らしてみよう。

高橋亀吉『増補改訂　日本資本主義発達史』（昭4・12・10　日本評論社）

初版の翌年三月の五版が手元にある。その『経済評論五十年　私の人生とその背景』（三十周年記念　贈呈版、昭38・5・31　投資経済社）によれば、瀬戸内の造船業だった生家が海運の変動にあい、丁稚（でっち）から学びあげて石橋湛山の『東洋経済新報』記者から研究者に転じた。動態を見通すエコノミストとして『中央公論』編集長の滝田樗陰（ちょいん）に信頼され『改造』『新潮』の執筆者でもある。同書は七章から成る。かりに①～⑦の順で示そう。

①幕末に於ける封建制度の倒壊　②明治維新の資本主義革命　③我が資本制度初期の発達　④我国産業革命の進展　⑤我国資本制度の成熟　⑥我国金融資本の発達　⑦日本経済の資本主義的発展の行詰と階級対立の激化

露伴が力を傾けたのは第二章・第三章の「明治維新の資本主義革命」「我が資本制度初期の発達」にあたる。つまり、旧支配階級―遊民士族の土地と知能を資本主義にどう組み替えたものか。もと下士層―西郷隆盛・大久保利通や江藤新平・大隈重信、山県有朋・伊藤博文・井上馨（かおる）らをおそった難題に、栄一や旧師で従兄弟の尾高新五郎ら―水戸学の藍問屋や農民が参入した経緯である。小野健知『澁澤栄一と人倫思想』（平9・4・15　大明堂）の第六章「明治初期の財政事情」に照らせば、財政と人倫の問題でもあったろう。

露伴には、他に幕末維新の権力機構に表だって触れた文章がない。時代を背景にした小説や伝記は庶民や職人が主役であった。それだけに「一国の首都」（『新小説』明32・11・12）などに見る文明論や、『論語』（昭22・4・30　中央公論社）所収の「一貫章義」（昭13・6）の忠恕論（ちゅうじょ）が、ここで栄一の〈算盤（そろばん）と論語〉の融和協調思想と対比される。

「中ノ家」の栄一―篤二―敬三、の人倫に照明を向けた佐野眞一（ママ）『渋沢家三代』（平10・11・20　文春新書）がある。露伴が栄一の「真生涯」を大幅に省いた意味でもあろう。

反世界

昭和十三年八月上旬の口述筆記「幻談」（『日本評論』13巻10号）は、季節むきの怪異譚ながら主客ともに正座

をしていたろう。話の中の侍も端座してアタリを待っていた。

江戸前の黒鯛、ケイズ釣りの話である。小普請入りでお役御免の旗本、閑がある。暮らしには困らない。約定の日に五十過ぎの船頭が神田川の船宿から本所まで舟を持ってきて艫に立ってくれる身分である。お侍はミョシに近い座に苫の屋根、左右に釣竿をすえる。

上品な釣りで、九世市川団十郎「故人成田屋」も、舞台では「今の幸四郎、当時の染五郎」を突っ放して教えてくれないのに、連れだした舟ではすわりようが悪いのどうの、小言ずくめであった。七世松本幸四郎から直接に聞きました、と作中で語り手―幸田露伴がいう。談話「釣魚小話」（昭4・10・12『東京朝日新聞』）でもふれた逸話である。

岡本綺堂の『番町皿屋敷』（大5）、『三浦老人昔話』（大13）や『半七捕物帖』（大6～昭11）の世界を思わせる。前年、ともに初の芸術院会員に推された劇作家ではある。

英書の小説を読んだという綺堂を思ったのは、「幻談」の幕切れと、枕に振ったウィンパー『アルプス登攀記』のせいでもある。初登攀のあと四人が転落し、残る四人が空中に見たという大詰めの十字架は露伴も英書の挿絵で見入ったろうが、松浦佐美太郎訳で岩波文庫の上は五月、下が出たのは九月。日中戦争が起きて一年目だが、江戸前の怪異譚、明治大正期の大川端、雑誌『新青年』の舶来趣味・探偵趣味、そうした名残が思われる。

二日つづきで不漁、竿までラリった夕景にお客さん―溺死者のにぎりしめた竿に出くわす。お侍がぎくりとやって指をはなし、約定の三日目も雨模様ながら船頭が来る。二人で竿を改めるとこれが野布袋の丸、一本竿で軽くできている。昼をすませて遅く出かけるとその竿で釣れるわ釣れるわ。つい夕景になって、また同じような竿に

出くわした。

「なんでえ、この前の通りのものがそこに出て来る訳は有りはしねえ、竿はこっちに有るんだから。ねえ、だんな、竿はこっちに有るんじやありませんか」

船頭も客も、薄暗くなった舟の竿のほうをのぞく。相手のおかしな顔を見る。この世でない世界を相手の眼の中から見出したような眼つきに相互に見えた。――幕切れである。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、客は竿を取り出して海へかえしてしまった。

むかしある釣りの先輩から聞いた話で、「徳川期もまだひどく末にならない時分の事でございます」という。話の素があったようだが、終わり近くにはデスマス調が消えて怪異な世界だけが現前する。口述あるいは校正の際、そのように運んだ芸であろう。

この話の素を追うのもわるくない。釣りの趣味から、現存する日本最古の釣りの本『何羨録』、などと展開して著者は津軽采女、四千石の旗本小普請組、吉良上野介義央の娘婿、さて竿の話題から鉤、釣り糸、錘、天秤、宇木、餌、釣り方、釣り場――、きりがない。

しかし、問題は怪異の仕組みである。前の日の竿とその日の竿、水の上の竿と舟の中の竿、旗本の顔と船頭の顔、相互に相手の眼の中に見出したこの世でない世界、という仕組みの謎である。鏡に映った像、右と左にたとえられる〈世界―反世界〉の問題である。

「風流仏」（明22・9）、「縁外縁」（明23・1　のち「対髑髏」）、「観画談」（大14・7）などの幻想が思われるが、「幻談」は〈世界―反世界〉の仕組みが際立っている。

たまたま同じ日付で『游塵』（昭22・7・10　東京出版）と『靄護精舎雑筆』〈養徳叢書　日本篇（30）〉（昭22・7・10　養徳社）が、亡くなる月に発行されており、『游塵』には序文（亥のとし春）がある。『靄護精舎雑筆』になく塩谷賛の後註（5・25）のみなのは、口述に堪える体力がなかったのだろう。発行日の七月十日夜半であろうか、歯の出血で血だらけのまま朝を迎えている。二十八日のあけがた、父と娘とでやや長く話したあと、「じゃ、おれはもう死んじゃうよ」（幸田文『父』）。三十日に露伴は逝った。

……陽光と游塵と相対して白を成す　韓柳の辞李杜の詞　皆游塵の現ずるところのみ人有り　吾が漫筆雑文を集め刊す　乃ち題して游塵と名づく／亥のとし春／露伴

韓愈や柳宗元の辞も李白や杜甫の詞も游塵。ここに収めた旧作も游塵。市川市菅野の仮住まいに横たきりになった露伴が、春霞を縁先の陸稲の空に見やった境涯であろう。

墨子（昭3・7）　魔法修行者（昭3・4）　神仙道の一先人（昭16・9・10）
仙書参同契（昭16・9・10）　著者署名の奇（昭2・5）　文学三題噺（大15・7）
閑窓偶筆（大14・2、3、4、5）　古支那文学に於ける小説の地位（大15・夏）

手元の『游塵』には遊び紙に「民国三十七年、秋日、求　王」というサインがある。翌年、国共内戦のころ意外なところに読者がいたのであろう。丸山真男『超国家主義の論理と心理』（昭21・5　『世界』）が登場し、ルース＝ベネディクト『菊と刀』（1946―長谷川松治訳1948―改版1966―1989第37刷）の裁断する視点が鮮烈だった時期である。一方、

中谷宇吉郎「露伴先生と神仙道」・「古代東洋への郷愁―『仙書参同契』の解説―」

著者は執筆に昭和二十六年から二十八年までを費やしたようである。その辺の事情はしばらく措き、雪の結晶で知られた科学者をそのようにうながした露伴の『游塵』と死生観から、改めて「鏡の中の物理学」（朝永振一郎）といった世界を思い見ることがある。

生物界はお互い鏡像みたいに左右対称がふつうのようだが、左巻きや右巻きのらせん構造は植物や動物に限らない。酒石酸と葡萄酸のような結晶にも、なにか左利きと右利きのちがいがある。無名のパスツールが顕微鏡と旋光計を使って、それが分子内部の構造によること、生物界の基本は非対称にあることを突きとめた。いまは隠れもない話であろう。

水晶など結晶体に光線の波動を通すと特定の方向に振動する。糖分の量を知る検糖計はそうした旋光計の一種としてワイン醸造や糖尿病研究に使われていたのだという。

分子構造の左右の研究は、原子から素粒子内の結合力へとすすみ、あらゆる現象の基本―相互作用力は、つよい順に①核力、②電磁気力、③弱い相互作用力、④引力、が認められたが、ある素粒子内部の均衡（パリティ）（parity）を表す符号は、なぜか③のもとでは崩れる。

二人の若い物理学者、楊振寧Chen Ning Yangと李政道Tsung Dao Eeが、その非対称を実験して論文を出した（1956）。呉健雄女史Chien-Shiung Wuがコバルト六〇で実験、原子核がコイル磁石のように向きをもつことを確認して問題は進展する。

北と南、右と左、生物お互いの経験を引き比べる端緒が原子核そのものにあるらしい。世界に対して反世界、お互い対称で鏡像をなす〈反世界〉が予想されるまでになった。

「いまお前に見えている赤い色が、他の人にも同じに見えているか、それを知ることはできない。お互いの経験を引き比べる方法がないんだよ」と言われ、あるゾッとした感覚に襲われたのを私は覚えている。（第十二章　私たちのメタファー）

お互いの経験、鏡像の不定（ふじょう）を語る父と娘の会話であるが、露伴は知るよしもなかった。G＝ベイトソン（一九〇四〜一九八〇）がサンフランシスコの禅センターで息をひきとったあと、一人娘のメアリー＝キャサリン＝ベイトソンが回想録を公刊したのは四年後である。

WITH A DAUGHTER'S EYE（佐藤良明・保坂嘉恵美訳『娘の眼から　マーガレット・ミードとグレゴリー・ベイトソンの私的メモワール』（1993・2・25　国文社）

重いメモワールである。母マーガレット＝ミードはニューギニアで三度目の夫グレゴリーと出会い、半世紀にわたってアメリカの人類学界に君臨した。対置してケンブリッジの遺伝学界を飛びだして文化人類学から精神の生態学（エコロジー）を踏み拓いた初婚の父グレゴリー＝ベイトソン（一九五〇離婚）。「母の両性にまたがる恋愛関係」（第八章）、R＝ベネディクトもその相手であった、母の死後にそれを知った？　いや、父の思考が濃密なのである。

遺伝学者の祖父は末っ子にグレゴリーと名づけた。修道士グレゴール＝メンデル（1822〜1884）の法則にちなんだものだが、事は簡単でない。レイチェル・カーソン『沈黙の春』（1962　青樹（あおき）梁一訳2001・6・25　新潮社）の「解説」によれば、客観と主観とを峻別するデカルト的思考のツケは大きかったようだ。青年グレゴリーの遠景に、時流に容れられることのなかった詩人W＝ブレイク（1757〜1827）の〈反世界〉が遠望されよう。